

# 言語ゲーム論考

"記号空間論" 草稿 No.20

橋爪大三郎

A ----- 11

B ----- 別稿

文献 ----- 56

年譜 ----- 59

\* 1

本稿では、いわゆる"言語ゲーム"を、社会学的な観点からとりあげ、それが、いかなる考之方であるのか、として、それが、わたしが目下建設をすすめている"記号空間論"の作業と、どこまでどのように斬りちがうものであるのかを、とことんまで論じつめていこうと思ひます。

"言語ゲーム"ということを書いたのは、Ludwig Wittgenstein (1889-1951)です。彼は、20世紀前半に、イギリスのケムスリッジを舞臺に活躍した、著名な天才的哲学者でした。

われわれ、社会の研究を志す者が、Wittgensteinのような哲学者の議論に、なぜわざわざ注目しなくてはならないのでしょうか？ このあたりのことから

まず、はっきりさせていきましょう。それには、"言語ゲーム"がどういうことを言おうとする考之方であるのか、はじめに簡単にでもマケツキしておくほうがいいのですけれども、相憤、くそれそれと言ふことがまちまちで、これとって説得性のある通説は見当たりません。だいいち、肝腎の Wittgenstein にしてからが、まとも、た明瞭な記述をのこしているわけでもないのです。そこでわたしの考之をのべるしかないのですが、わたしのみるところ、結局、この"言語ゲーム"という考之方は、「主体」や「世界」——思考をはたらかせたり行為を営んだりする人間主体であるとか、ふつう端的に実在するものであると考えられたりしているような世界であるとか——を産出するやうな、当のメカニズムそのもの、のことである(らしい)のです。つまり、"言語ゲーム"の正体(ないし本態)というものがあつたならば、それは、<社会的なもの>とそれ自身だ、と言ふまあ。"言語ゲーム"といつても、それは、社会のなかの一區画でもって営まれてゐるやうな特別のゲームあれこれのことではなくて、それらをすべて含むけれどもそれらよりもっとはるかに大きい、社会秩序そのものことなのです。われわれ社会的人間は、この"言語ゲーム"のなかで、たんにその駒であつたりするにすぎませんし、また社会といふこともそのゲームのゲーム盤であつたりするにすぎないのです。このやうに、"言語ゲーム"の正体が、社会の社会たるゆえんそのものだとするれば、われわれの社会学的関心からしても、どうしてもこれを見のがすことができない、ということになるのは当然でしょう。

\* 2

ところをわたしは、"記号空間論"を構想する以前から、ずっと、<社会的なもの>について考えてきました。<社会的なもの>とは何だらうか——それをはっきりとつかみだすことが、社会理論に、それが鋭い目とするはずの照準を与えてくれるでしょう。

社会学の古典や、それに先立ち、社会に対して系統的に考察を加えた人々が、いちやうに、社会をどのやうなものと設定し、どのやうに種まきればよいのかという点に、最丈の心血をそそいできたのは、とてみやすいことです。Hobbes, Rousseau, Comte, Spencer のやうな社会(科)学第一世代のひとび

とは、人間の営む社会なるものが固有な秩序をもつ自律的な一領域であること  
を、明瞭に指摘しはじめたという点で、社会の発見者でありました。しかし  
ながら、そのように見出された社会は、どのような実在性をさなえているのか  
に関しては、自分も直感のつかむにまかされ、幾分はあいまいなままに放置さ  
れた、と言っていいでしょう。これにつづく、Marx, Weber, Durkheim, Sim-  
mel のような世代のひとびとになると、それぞれ、社会の実在性について、固  
有の徹底した理解を示しました。彼らはめいめい「社会的なもの」についてこの  
主張点を持ち、それを核に自分の理論を展開していった、とみることができま  
す。ここでわたしがとりわけ注目したいと思うのは、Durkheim の「社会学主  
義」の発想です。

Durkheim は、「集合表象 representation collective」の概念を創案し、これ  
を社会学的事実の記述の対象であると断言しました。個体をこえ、「社会的事実  
fait social」の水準に見出される社会の実在性が、この「集合表象」だと言  
っていいでしょう。個体のありかたに還元も解消もされない、個体の集合形態の  
導人である創発的特性——ここに Durkheim は、「社会的なもの」を嗅ぎつ  
けます。こうした Durkheim の論理構成は、社会理論としてきわめて妥当な考  
え方だとみられます。

ところが、よく考えてみると、Durkheim のこうした発想は、西欧近代の主  
潮流を基準にとってみると、きわめて異質な、むしろ異様なものと映ること  
がわかります。(あるいは、近代の主要な思想傾向からかえりながら、「社  
会学主義」的思考は傍流でしかない、というふうにも考えられましょう。) し  
かし、社会学が自分の(学としての)自己同一性を手に入れようとするなら、  
(たぶん)どうしてもなしではすませることのできないある契機を、この発想  
は含んでいるのです。ただ、残念なことに、Durkheim の着想の正確な内容と  
その真正の含意、そしてその厳密な射程と限界とについては、まだきちんとし  
た討議がなされないままほおっておかれている、というのが実情のように思わ  
れてなりません。

因みにこの Durkheim の社会学的事実の発想は、その理論的な含意の中に、いくつ  
かの重要な創造的営為をほぐくむ、かくれた地下木脈の一半をなしています。よく  
知られているように、Durkheim の後継者 Mauss, そして Lévi-Strauss ならびに  
構造人類学流派へと流れくたさる木脈は、20世紀のもっともすすんだ知的形態のひと

つである。構造主義——これは、西欧的知性の脱中心化、脱主体化をいみします——  
へと至りました。また、現代言語学の生みの親である、Saussure の仕事にも、Durk-  
heim の「社会学主義」は少なからぬ影響を与えています。(Saussure からはまた、  
Jakobson らを介して間接的に、構造主義人の影響を考へることができま

\* 3

さて、「社会的なもの」について考えすすめている、と申しましたが、この  
ように言うと、「社会現象について言及したり考へたりすることは、ちっとも  
むずかしいことではないじゃないか?」と言いだすひとが出てくるでしょう。  
現に俺だって、社会についていろいろ知っているし、あれこれ考へてもある、  
というわけですよ。

なるほど、ちょっと考へると、誰でも社会について喋っているのだから、社  
会について考へたり研究したりすることも、きわめてたやすく造作もないこと  
のように見えます。社会について考へるのを専らとする、職業的な研究者たち  
のあいだでも、こうした受けとめ方が支配的です。こうした人々には、いくつ  
かの傾向が区別されるかもしれませんが、ひとつは、素朴な実証主義 naive em-  
piricism たった人々です。だが、そういう人々に対しては、わたしはこう言  
いたい——あなたがたのやり方は、たしかに、社会(現象)に関する実証的な知  
識がえられる、けれども、それが実証でありうるのはそれが断片であるあいだ  
だけだ; そうした知識の断片を、いったいどのようにして全体的な社会像へと  
合成するつもりであるのか? 現在、社会の(いわゆる)実証的研究にたずさわ  
っている人々は、こうした総合ないし理論化への契機を事実上放棄することに  
おいて、彼らの営みをつづけているにすぎません。(よくとも、社会学の場合  
には、そうみえます。) そうしたアルバイト集団が、社会理論を構築したり社  
会を説明するための全体的構想を述べたりすることなど、およそ考へられませ  
ん。

もう一群の人々は、すでに社会学は一般理論 general theory をもっている  
じゃないか、と考える人々です。そうした理論は、たとえばマルクス主義理論  
であるかもしれませんが、構造=機能理論であるかもしれません。しかしわた  
しのみるところでは、これらはいずれも、満足すべき社会理論にはほど遠いも

のです。マルクス主義に対してなら、わたしは、これははや破産に類している19世紀的の言説様式であることが自覚できないのか、というふうに申しませう。Sartre はかつて、"マルクス主義はいまよも現代的な、われわれの哲学である" といういみのことをごまかしました。しかし今日、マルクス主義は急激で、その舞台からしりぞきつつあります。今世紀はともかく、21世紀にはその急激的な余韻もつきこまうかわかりません。その基盤は、すでにボロボロに喰いあらされていきます。そうなったのには、いろいろ理由もありまじょうが、根本的には、それが採用している「唯物論的」な言説様式が社会的な現実と吾当しない、ということがあると言えます。その文体は、あまりに蒸れ（ないし塵埃）です。その唯物論は、相当にスサンを種敢て実在の観念のうへに垂かいていきます。そして、その体系は、言語への怒るべき目配りを欠いていきます。こうしたことが致命的な要因となつて、マルクス主義運動の思想的なセンマイはこのところすっかり縮みきつてきています。といふやうに、"マルクス主義があるから社会学も大又天だ" というふうには、わたしはさらさら思いません。それどころか、マルクス主義は、すっかり乗ったら大変なことになるドロ舟だ、と考へた方がいいでしょう。（わたしは Marx ファンであり、大いに尊敬もしていますが、それとこれとはまた別のはなしです。）また、構造=機能理論に対してであれば、（以前のべたことがあるのですが）つぎのように申すとしまじょう——まず、(i) それを、理論の体裁をなしているのか、理論の体裁をなす見込みがあるものなのか、として、(ii) いったい「社会的なもの」を記述の対象としてつかんでいるのかどうか、はなはだ疑問である、と。（詳しい話は省きますが）いろいろ考へれば考へるほど、この疑問ほどこまでも膨らむばかりです。したがって、"さあ、こつて構造=機能理論に結度し、社会理論を完成させよう" というふうに、わたしは恐ろしいのです。といくらいならむしたる自前で自分の立場を積みあげていくほうが、よっぽど手とりはやい、というのがわたしの予想であり、わたしのやり方です。

マルクス主義や構造=機能理論のほかにも、各だたる社会理論があれば、逐一検討の対象にしようというのか、わたしの考へですが、社会学にはそれらしいものが見当たりません。いくつか理論を各採つていくものもありますが、いまこころ言及すべきほどのものではない、といちおう考へておきます。

このように、わたしの批判的な観念からするならば、社会学は、社会をつかまえていくどころか、恰恰にく社会的なものを目下のところすっかり見失なつていく、というのが実情だろう、と仰ります。社会と対峙し、社会を理論的に解明しようとする知性は、いちから仕事をひじめるつもりでなければいけません。

#### \* 4

こうして、社会理論としての社会学は、まだまだ「前理論的」な段階にとどまれている、ということが、いやがうへにも明らかになつてきました。こうした停滞・閑塞・不毛の原因がどこにひそんでいるのか、よくよく考へてみることがあります。

社会学にはこのように中味がないとしても、そこから隣接領域へと目を転じてみると、それなりに見るべき「成功」をおさめている社会科学も、いくつかみつけることがわかります。たとえば、経済領域での（近代）経済学。あるいは、機能主義や構造主義といった方法を有する、（社会）人類学、厳密な教理モデルを有する（理論）言語学。そのほか、特定領域での社会現象を扱う、特殊な社会モデルを擁する社会理論のたぐい……。社会学だけが、なにかの理由によつて立ち遅れ、そこからとりのこさているようにみえます。

こうしたときにひとかとりうるひとつの戦略とは、つぎのようなものかも知れません——それら隣接社会科学の成功の原形は、理論的な説明をそこに加へるべき記述の対象と、理論的な説明を組み立てるための記述の論理とか、相互にしっかりと噛みあい、調和をもつて発展しているところにある。だから、社会学もそれと真似しよう。つまり、まかなんとかして、社会学独自の記述の対象を、手に入れること。そのためには、社会的なものをとりだすために必要な、抽象の連座を確定しなければなりません。そして、その抽象に即して、社会の客観的なモデルを掴み、そのモデルの挙動を論理的に分析して、理論の内幕を手に入れること。このようなステップによつて社会理論を構築しようとするアイデアです。この戦略によると、いまわれわれのまへにある障礙とは、主要には、社会学独自の記述の対象を抽出するのがむずかしい、というたぐいの困難からなつていていることになつてきます。たしかに、社会学は、社会現象の特定領

取の特殊な社会現象ではなく、その全体領域をなしたにせよ社会現象をとりあつかわなければなりません。これは困難なことです。近代社会はいくつかの下位システムへと分解可能 *decomposable* であるように、そもそも組みあがっています。それにたすけられるようにして、経済学、法学、政治学、等々の個別社会科学が発達してきました。これら下位領域をすべてとりこむような全体的な組みとして社会を考え、こうした社会を対象的につかむ独自の抽象水準を定めようとするときには、われわれの社会が分解可能であるという利点にたすけられることができません。こうした困難を、社会の全領域を扱おうとする作業にともなう困難というように、みることもできます。社会理論のいとなみは、たぶんこうした困難をのがれることができません。(構造=機能理論も、ここで叫びなければならぬでしょう。全体領域を扱う理論をつくらうという場合、理論の実証的な構成を保つことがむずかしいからです。またたとえばマルクス主義が「弁証法的」な構成をとらないわけにはいかななくなっていることの原因を、この辺りにあるだろうと思われまふ。)

構造=機能理論の(とりわけわが国の構造=機能理論の論客たちの)戦略は、基本的に言って、いまのバタようなものであるようです。そしてまた、わたしの「記号空間論」の作業プランも、社会理論として自己形成することを目標として、ある部分ではそのように考えてきました。しかし、ここで改めて検討する必要があるのは、つぎのような疑問です——理論社会学の狙っているように、考察の対象を社会の全体領域にまで拡張しようとするとき、そこに、上のバタとまた異なる、新しい創発的な困難が生じてくるのでは、ないだろうか？ 上述の、社会理論の基本戦略は、前提からしてくっがえってしまうのではなかろうか？ そうだとすれば、こうした戦略は全面的な再検討を迫られまふ。実は、こうした可能性を気付かせてくれるものこそ、「言語ゲーム」の議論なのです。

\* 5

構造=機能理論のような議論は、物理学を範式とするような(自然)科学観に従って、組み立てられています。この種の議論は、主観として客観にかかわろうとするところから発しており、自らを現象意識として利すましていくこ

とにより、厳密さを増し、対象にちかづいていく、とする性向をもっています。ところが、いま新たにみつけられた困難は、こうした古典的な主/客図式を、まぶまぶさまにおびやかします。

こうした困難の種類は、どのようなものでしょうか？ 社会理論を一般理論 *general theory* として組み立てる試みの困難とは、たとえばこういうことです：理論を組み立てる(研究者の)理論的な営みそれ自身が、すでに「社会的な」営みであるために、この理論は、記述すべきものを、たんに自身の外に「対象的」につかめばよい、というものでは必ずしもなくなってしまっている、ということ。社会理論の場合には、理論が言及するものと言及する理論とが、いわば「共振」しはじめてしまう可能性があります。特定領域の社会現象に局限して議論をすすめているあいだは、この可能性は一般に無視しうるほどのものかもしませんが、全体領域におよび一般理論へと拡張をこころみるととたんに、こうした困難が出現してくる、と言えまふ。 (これは、単純な帰帰分析に比して同時推定法が困難であるのと、やや似たところがあるようです。) わたしは、これを、回帰性 *recursiveness* にもとづく困難、というふうに呼びことにします。社会理論をみまうこの困難に対処しようとして、理論的な言説の内面的構成(人称構造の布置、など)に工夫をこらす必要があることを、すでにわたしは「文法問題」として指摘しておきました(橋爪 [1978])。

\* 6

ところで、回帰性にもとづく困難に真実にとらえられたのは、イデオロギー批判の言説でした。「意識は存在に規定(ないし拘束)される」との命題を、公理のように適用しようとする知識社会学の批判的な営みは、たちまち重大な背理に直面することになります。イデオロギー批判は、「オメエ、隣ネエじゃネエか」という悪口に類似した、外在的な批判です。しかし、この批判的な言説は、それなりに首尾一貫したみかけをもっとしても、自身が言及する対象の完全な外縁にたっているわけではありませんから、すぐさま「オメエだって、隣ネエじゃネエか」という逆襲に対して、無防備なものでしかありません。知識社会学の素朴だが、知識や言説の出自について好い加減な自己反省しか示すことのできないあいだは、イデオロギー批判は、かならず上のような決着のつ

きょうのない相互疑下へと移行してしまいます。(これはちょうど、"オメエこそ臍ネエじゃネエか"という悪口の応酬の果てに、結局、誰に臍があって誰に臍がないのか、すっかりわからなくなってしまう下らなさと、似たところがあります。)

知識社会学の失敗は、言説論である理論と、理論の言及の対象とか、相互に繰りこみをおこし、ついには言説のいみを変調させてしまうという可能性を計算しそねたところに、原因があります。たとえば、ある言説が、かくされたイデオロギー的メカニズムの所産であることが事実であるとしても、それをそのまま(言説の形式)表明するわけには、いかぬいかせられないのです。

これにくらべると、構造主義者たちは、段ちがいに賢明である、と申すべきでしょう。構造主義は、独自の手法という形で客観的な根拠を示しながら、知識の諸形態や言説論を説明する仕方が存在することを、われわれの前に明らかにしました。この客観的な手法を糧にして、構造主義は、解釈者の主観や偏向からあたうる限り遠ざかる、というわけです。しかし、構造主義においても、上述の回帰性にもとづく困難の解決は、たんに示唆されているにすぎません。つまり、社会理論を志向する者の行手には、まだ大きな障壁が、その全貌すら明らかでないままに、立ちふさがっています。わたしは、この解決への手がかりを、構造主義からずれたところに、たとえば、Husserl, Wittgenstein, Foucaultの3人の仕事のなかに、とりあえずみとめることができるのではないかと、目下考えています。この3人は、行きなかり上それをい異なった傾向を代表する人物のようにみられていますが、こうしたうわべの下にある各人の仕事の實質にあえて注目してみるならば、そこに共通するものがあることを、われわれは容易に知るようになるでしょう。各人は、あるいは知らず知らずのうち、〈社会的なもの〉を丸のまま相手とする言説へと接近しており、そこに各様の苦闘の跡をしるしているのです。ここから、われわれは、解決への大きな鍵を見つけないとも限りません。

#### \* 7

以上のようなわたしの考え方が正しいとすれば、つぎのように言えるはずで——一般理論であるような社会理論の困難というものは、たんに、モデルを

設定する仕方がむずかしいとか、構想するのが骨が折れるとかいった水準の問題であるわけではない。もしそういう水準の問題であるならば、「文法」的な治療も有効なはずであって、たとえば、構造=機能分析が定式化するような論理が社会理論を正しく導くであろうと予想する楽観的な主張も、それ相応の根拠をもつことになる。ところが、問題になっているのは、いっそう基礎的な水準の問題——社会理論が、記述すべきもの(〈社会的なもの〉)を、対象的なかたちでもつことが、できるのかどうか——なのである。

いまや、社会に関しては「理論」なるものをそもそも構想することができるのかどうか、どこまでが及びやけされるに至っています。Wittgensteinが"言語ゲーム"論を疑ってかかったのは、対象への言及可能性です。あるいは、対象の実在を確証するための手続きの存在そのもの、なのです。

#### \* 8

こうした問題の存在を、わたしはかねてからうすうす察していましたので、つぎのように考えることにより、社会理論をかたちづくるう、としました。

〈社会的なもの〉と社会理論とは、相互に外在しあうことができないでいます。互いに分離されることのないまま、互いを奪みあっています。互いが互いのなかに、あるようにみえます。つまり、〈社会的なもの〉は社会理論のなかに、社会理論は〈社会的なもの〉のなかに。このようなややこしい両面の結びあいの結び目にあるのは、〈言語〉です。それゆえ、〈言語〉を主題的にとりあげる社会理論(だけ)が、こうしたもつれを切りわけ、回帰性にもとづく困難に立ちむかうことができるでしょう。〈言語〉は、〈社会的なもの〉と社会理論との、根拠をなすものです。

こうした着眼のうえに社会理論を組み立てようとする社会学も、わたしは、〈言語〉派社会学とよびならわすことにしています。そして、わたしの社会理論の試みである"記号空間論"を、〈言語〉派社会学のプランを実現するものとして完成させるべく、努力してきました。ところで、Wittgensteinの"言語ゲーム"論の仕事は、いちがうしく〈言語〉派的であり、〈言語〉派社会学の矢駈(のひとつ)と言ってもかまわないのではないかと、思われるほどです。というのも、〈言語〉派的な発想からわたしが苦心してつみあげてきたさまざま

まの概念装置が、きわめてよく似た、一部はほとんどそっくりな形で、Wittgenstein の "言語ゲーム" 論の仕事のなかに、見つかるからなのです。(たとえば、「行為の集合性」、「規範」、「規則のシステム」、「恣意性」、「生活形式」、「告白」、などといった彼の概念が、こうしたものの典型です。)

それゆえ、場合によっては、Wittgenstein の "言語ゲーム" 論は、〈言語〉派社会学の力強い味方として働いてくれるのがむしろいいかもしれません。ところが、Wittgenstein は、およそ "言語ゲーム" に関して理論なるものが成立する余地をみとめておらず、理論を否定するような発言をくりかえしています。これは、無視できないことです。なぜなら、もし彼の主張が正しいなら、社会理論は試みられる前から失敗を宣告されてしまったようなものですから。この発言が、他の誰ならいざしらず、ほかならぬ Wittgenstein のものであるだけに、わたしは "言語ゲーム" 論の現実を見きわめておく必要があるのです。

こうして、わねわね、Wittgenstein とともに、彼の "言語ゲーム" 論の首魁をあとづける作業へと、おもむくこととなります。



\* 9

Wittgenstein の思想を理解しようと思えば、彼の数奇な生涯と、一風変わったひととなりとのみこんでおくことが、欠かせません。ただ、ここではそれをかえりみるまでのゆとりもないので、最も代表的な Malcom による伝記の名をあげておくにとどめましょう (Malcolm [1958=1970])。この書物のいぎい

とした筆致は、生前の Wittgenstein の容色、彷彿とさせて余りあるものがあります。

便宜のため、付録として、Wittgenstein 略年譜を、おさめておきました。ここで、彼がウィーンのエダヤ系上流家庭に生まれたこと、数学を經由して論理学、哲学へと関心を転回させたこと、などなど、どうしても知っておかなくてはならないことのいくつかを、確認できるでしょう。とりわけ彼が、前期の仕事『論理哲学論考』としてまとめているのみで、"言語ゲーム" 論をまとめた書物の形ではのこしていない点は、大切です。(彼が生前発表し、活字となった論文は、いまのわた『論理哲学論考』——これとて薄っぺらな冊子です——のほかには、小さな雑誌論文がただ一篇あるにすぎません。) そのほかの書きもののうち、矢張りまぬかいたものは、今日遺稿のかたちで目の目を見、邦訳を通じても利用できるようになりました。

\* 10

よく知られているように、Wittgenstein の仕事は、前期と後期とに分かれています。前期を写像理論、後期を "言語ゲーム" 論と拮抗づけることができましょうが、この両者は似たところ、いちぢるしい対照をなしています。1930年(40才)ごろ着想したと思われる "言語ゲーム" のアイデアは、その後ふくらんで、後期の中心思想としての位置を占めるのですが、その内容は、彼の前期の主張にくらべてさへなお、明らかにされないうまにとどまっている、というのが現状のようです。

"言語ゲーム" 論の解明も、その継承も、いっこうなかばかしくすすんでいないというのは、どうしてでしょうか？ それには、いくつかの理由が考えられます。Wittgenstein はしばしば、難解かつ晦渋であるといわれます。それは、彼の思想が、通常の哲学的な土壌からみて特異であり、特定の先行者をもたない独自のものであることに、由来するでしょう。また、著述のほとんどが生前公刊されなかったこと、わずかに出版された『論理哲学論考』が、前期思想の集大成であるために、かえって Wittgenstein の全貌を隠蔽するようにはたらいこしたことも、もあります。さらに、後期の思索は、ケムスリッテの彼の演習を通じて少しずつ明かされていったのですが、その出席者や弟子たちが(彼

にくらべれば) 凡庸でありすぎたために、彼の思想を十分に理解することができなかった、という事情も、加わっています。(しばしば乞のようなとりまきもうみだしてしまうのも、天才の特徴です。) Wittgenstein は、こうして自分が誤解されまくることを極度に恐れるあまり、草稿や講義ノート類の公刊を許さず、彼の存在はそのためますます神秘的なものとうけとられるようになりました。

Wittgenstein の演習で教えもうけた Anscombe らの直弟子たちは、Wittgenstein の思索の発展を、教理-論理哲学から日常言語批判へと転回していくものというふうにおさえているようです。こうしたみかたも、「正統」的な見解と言っておきましょう。Wittgenstein の『論考』に一期期大きく影響された論理実証主義-Logical Positivism の運動にかかわるく々の理解も、上述の見解と近いとみられます。こうした「正統」的な見解からすると、Wittgenstein を理解する鍵は、Frege や Russell から教理-論理哲学の先行的な諸研究を再精査する作業のなかから見出されるだろう、と予想されることとなります。

しかし、最近発表されたより若い世代の研究者の Wittgenstein 理解には、こうした「正統」的な見解に真正面から異論を呈するものがあります。とくに Janik-Tourmin [1973=1978] は、大いに注目に値するでしょう。これによれば、Wittgenstein の知的な営み、哲学上の冒険は、彼の出身地である Wien の知的共同体を背景とするのでなければ、いささかも理解できないのです。当時、世紀末から第1次大戦までの Wien は、没落しつつあるオーストリア=ハンガリー帝国(カカ=ニア)の、爛熟と衰微のないまぜに育った文化の坩堝でした。この世界の中心、創造の小宇宙は、20世紀を基本的に規定する創造的な営みの噴出口のごときものです。科学・芸術・文化のあらゆる領域を網羅するこの運動を、昔言らは「クラウス主義」と命名していますが、Wittgenstein の哲学の内奥も、このような運動の一分枝としてつかまえることとなります。Wien を中心とするこの知的宇宙につらな。た人々の顔ぶれの多彩さは、まことにおどろくばかりです——たとえば、L. Boltzmann (統計力学)、S. Freud (精神分析)、H. Hertz (理論物理学)、H. von Hofmannsthal (作家)、F. Kafka (作家)、H. Kelsen (法學)、G. Klimt (画家)、O. Kokoschka (画家)、K. Kraus (批評家)、A. Loos (建築家)、E. Mach (哲學者)、G. Mahler (作曲家)、F. Mauthner (思想家)、R.

Musil (作家)、R. Rilke (詩人)、A. Schönberg (作曲家)、R. Strauss (作曲家)、G. Trakl (詩人)、O. Wagner (建築家)、B. Walter (指揮者)、……。しかもこれらの人々の多くは互いに知己・友人同士であり、互いに濃密な影響関係を築き、之を争ったのでした。そして、Janik-Tourmin の主張によれば、『論理哲学論考』とは、このような知的宇宙のあらゆる要素をもっとも簡潔に要約した書物にほかならないのです。

このようなあたらしい Wittgenstein 理解は、たしかに、従来の解釈とはとくことのできなかつた謎を解明するだけの、鋭利な力をもっています。たぶん、《思想の歴史に無知な者はそれを再演する運命にあ》り、また、《思想の脈絡を知らない者は、同様にそれを誤解する運命にある》(Janik-Tourmin [1973=1978:28]) ということは、本当でしょう。したがって、われわれも、Wittgenstein の仕事を根こそぎ理解しようとするなら、当然、彼の思想の母胎である世紀末 Wien の思想的土壌を、あらゆるジャンルで探査して見るのでなければならぬはずで、しかし、これは、いまのわれわれにはあまりにも仰山な課題です。そこで、この方面については、その豊かな奥行きを確認しながらも、さしあたりは Janik-Tourmin の受け売り=早わかりで満足することとしましょう。社会理論と“言語ゲーム”論の交錯に、最大の関心をよせるわれわれは、ともかくも Wittgenstein の著述のなかにあらわれたる限りでの、“言語ゲーム”関連の議論を、その論理において問題とすることとします。(その思想的脈絡を切開することは、一切見合わせます。)

\* \*

こうしてわれわれは、“言語ゲーム”を、〈社会的なもの〉の実態の嫌疑で追跡します。このような追跡の方針は、追われる Wittgenstein の立場からしてみれば、ほなほだ心外にうつるかもしれません。そして多分、113のべた Wien の知的土壌を計算にいれたうえでもなお、Wittgenstein の仕事を位置させている思想的な脈絡から(大外れでないにせよ)少々外れているにたがいないでしょう。しかしそれでもかまわないと思います。なぜなら、“言語ゲーム”論は、Wittgenstein ひとりのものではなく、はるかに普遍的な議論だと考えられるからです。彼の“言語ゲーム”論は、“言語ゲーム”に関する、まだまだ未完成

で仮定的な試論(のひとつ)にすぎない、というように考えられます。ですからわれわれは、Wittgenstein をとりまく哲学史上の経緯や、彼のいちいちの論法には、かならずしもこだわる必要はないこととするのがよるしい。彼はたまたま、もっとも早くきわめて勇敢に、"言語ゲーム"の考え方につきあたった大胆な知性である、というように考えるのです。そのかわり、われわれは、彼の"言語ゲーム"の着想を、およそできるかぎりふくらませて、理想化してみましよう。彼の議論を、その論理においてつかみだし、それを極端にまでおしすすめてみるのです。そういう仕方から、おそらくわれわれはもっとも得るところが多いはずです。

それではわれわれは、まずどこから手を付けていったらよいのでしょうか? 困ったことに、Wittgenstein は、"言語ゲーム"について、ここが決定的だと言えりほどの明快でまとまった記述をのこしていません。それは、ひとつには、"言語ゲーム"のアイデアが、彼のなかで徐々に徐々に蓄ちつづけていったからです。そして、もうひとつには、彼が、"言語ゲーム"について想定したり対象化的な論述を与えたりすることは不必要だし、不可能でもあると考えていた——そうらしい——、ということがあるからでしょう。「言語ゲームとはこれこれである」という言い方は決してなされず、そのかわり、ちょうど福音書がそうであるように、「言語ゲームはこれこれでない」「言語ゲームはなににたのようである」といった間接的な言及法が、専ら用いられます。このように、"言語ゲーム"は直接定義されたり論述されたりしてはいないので、その内実を追究することがむずかしくなっています。現に、わが国の研究者の紹介論文のたぐいを読んでも、(若しかすると、わたしの読んだものがたまたまそういうものばかりに当たってしまった、というだけのこともしいかもしれませんが、)ほかほかしい説明は与えられていません。

わたしの考えでは、Wittgenstein の"言語ゲーム"論は、前期のいわゆる写像理論と対比させ、その対照のなかで理解するのがもっともわかりやすいだろう、と思います。"言語ゲーム"論は、前期の極端な言語思想の瓦礫のなかで着想されたものであり、前期の考え方からの反作用によって、自身を組み立てていきました。前期の『論考』と後期の"言語ゲーム"論とは、たしかに一貫したひとつの強い動機によって、みちびかれています。前期と後期との見かけ

をほぼはだ異なったものにしていりる語要素は、この一貫した動機にくらべればずっと表層的なものです。そこで、前期の写像理論をまず理解するようにつとめ、それとの対比のなかから"言語ゲーム"の考え方をうきほりにする、という作業を、しばらくのあいだすすめてみるとうましよう。

#### \* 12

Wittgenstein 前期の主要著作、『論理哲学論考』(1922年刊)のモテーフと論理構図をあえて要約しつつ、図式的に表示すると、つぎのようになると思われます:

- (1) 世界は、分析的である(ないし、分析可能である)。
- (2) 言語は、分析的である(ないし、分析可能である)。
- (3) 世界と言語とは、写像関係にある(ないし、同型対応している)。
- (4) 以上(1)~(3)にあげたことのほかは、言及不能・思考不能である。

わたしの理解がでたらめでないとするれば、『論考』の骨子は、この4つに尽されるはずだ。この時期のWittgensteinの考えによれば、世界も、また言語も、(それなりに複雑ではあるのですが)所詮は有限のものです。つまり、その構成素へと噛みくだいていく手續をきつづければ、かならず行きどまりに達着します。またいっぽう、世界も言語も、同じ構造をもっています。そのため両者は、同型的であり、互いに写像関係によって結ばれるわけだ。 (言語と世界とが同一の構造をよる理由——それがなにゆえであるのかは、かならずしも明らかではありませんが、たぶんひとつは、そのようなものとして、世界の像 Bild をつくるから存のでありましよう。ひとつの行役していりる言語とは、本質的にそのような像である、とWittgensteinは考えます。\*)

\* ここでいう言語とは、もちろん、日常言語のことではなく、論理へと理念化された言語のことであるわけだ。

こうして、まっとうな言語や思考は、あくまでも世界を自身にかゝるものなのであるから、Wittgenstein は、哲学が固有の内容をもつことをみとめていません。(1)~(4)の内実をよくよくゆきまえることによって、ひとは哲学から解放される、とするのが、彼の前期の考え方だ。



この少々粗っはすぎる前期思想のスケッチを、さらに粗っはく図解してみましよう。

まず、世界は、そのもっとも単純な構成系である事態 Sachverhalt  $\wedge$ 。さらに、事態を組み立てる語契機であるところの、もの Ding ないし対象 Gegenstand  $\wedge$  と、分解してとらえられます。ここで、事態と、ものないし対象とが、別々の水準に属すると考えられていることに、注意しなければなりません。ものないし対象は、それとして単独で在りうるわけではなく、向らかの事態の契機であることによつてその存立をえているのです。

他方、それに即応して、言語においても、要素命題 Elementarsatz と、その契機である名 Name あるいは変項 Variable とがあります。要素命題と、名あるいは変項とでは、やはりその水準が異なっています——名あるいは変項がものないし対象をさし、それらを意味 Bedeutung とするものであるのに対し、(要素)命題は、事態(の成立)をさし、それを意義 Sinn とするものであるからです。命題は、事態と、写像形式(論理形式)を共有しているので、事態をさすことができます。ある命題の意義である事態の成立していることが、その命題が真であることであり、成立していないことが、偽であることです。命題はこのようにして、世界に言及します。

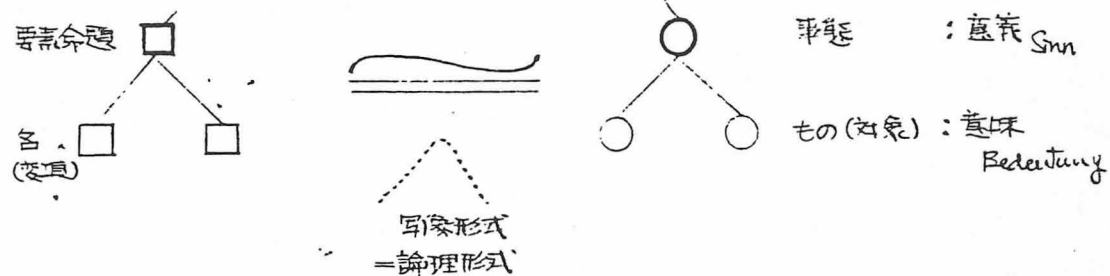


図 13-1

いくつかの事態が組みあひつて、複合的な事態となることが考えられますが、これは、複合命題によつて言及することができます。複合命題は、いくつかの要素命題を合成することにより、えられます。複合命題が真であるか偽で

あるか、すなわちそれの真偽値は、それに含まれるすべての要素命題の真偽値が判明であれば、そこから計算できます。ひとはさまざまの複合命題をいくらでも形づくってみることができまうでしょうが、そのすべてが意義をもつとしても、そのすべてが真であるとは限らないのは、むづかしいことです。言語が含むすべての命題のうち、ある部分は真であり、現に成立している事態のすべてに対応します。またある部分は偽であり、現に成立していない事態に対応します。(意義をもたない命題や同語反覆のことは、ここでは扱かしてあります。)そして、現に成立している事態の全体が、われわれがここで生きる世界なのである。と Wittgenstein は考えます。彼は、『論考』の冒頭で、つぎのようにのべます:

« Die Welt ist alles, was der Fall ist. (世界とはかくあることの全体である。 ) »

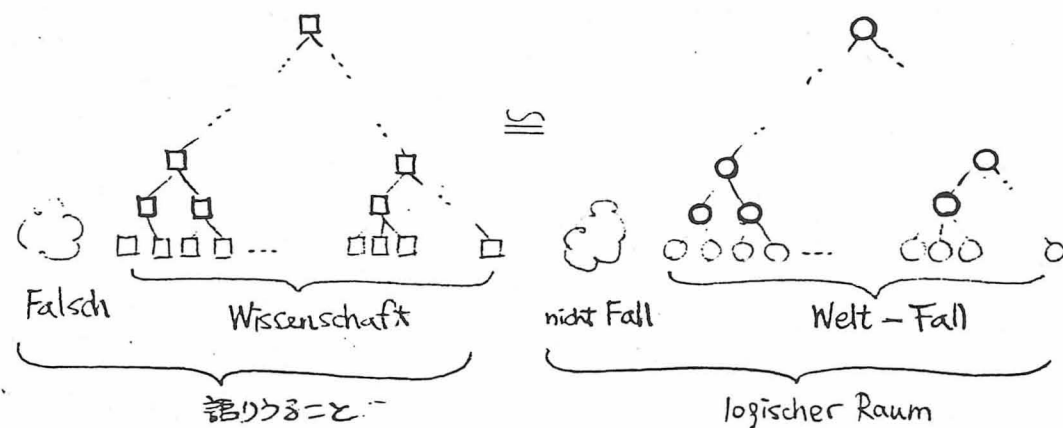


図 13-2

成立していることからの全体は、ひとつの位階秩序をなします。すなわち、要素的な事態は、一連の複合的な事態や事実を織りなしていきます。こうしてはられる全体が、世界とよばれています。世界は、成立してもよかつた(成立可能であつた)ことからの全体——これがたゞ人、論理空間とよばれているものことでしょうか——の、たまさかな部分集合にすぎません。(世界は端的にかくあるだけであつて、そこには根拠が欠けています。ひとはここに、大いなる不条理をみとることもできるでしょう。) ちょうどこれに対応して、言語の

削でも、真なる命題の全体からなる部分集合——たぶんこれは、学 Wissenschaft とでもよぶべきものだと思われまふ——と、然らざる命題の部分集合とがうまれます。そして、このふたつが合わさって、「語りうること」をかたちづくりまふ。その外には、沈黙があるしかありません。ことばは、世界との対応においてその機能を保っており、このような対応から切りはなされたことばは、すでに語りえぬことの領域に属してしまします。

\* 14

『論理哲学論考』が提示してみせた、言語と世界とについてのモデルは、大略、いまのべたようです。ここで検討されている言語とは、泉のところ(すでにのべたように)日常言語の具体相から抽出された理念的な言語のことですけれども、およそ意味のある言明や確実な知識は、残らず、いま省略したような世界との対応をその根拠としているはずだ、と Wittgenstein は考えました。そして、このようなモデルを前提とする写像理論にたつならば、在来のすべての哲学上の問題は片附いてしまうにちがいない(自分は事実上その可能性をすでに示した)と考えて、Wittgenstein は哲学から足を洗い、自ら設定した哲学の領域区画の外へ歩み去ってしまふのです。もはや哲学とは、自分の関心を惹きつけてやまぬだけの謎は、残っていない——彼には、そう思われました。そこで彼は Wien へかえり、遊地の小学校教師をしたり、庭師をしてみたり、あるいは姉の邸宅の設計に2年間もかかりきりになったりします。(彼には、職業としてえらぶことにより哲学を汚す気持など、毛頭ありませんでした)

\* 15

こうした Wittgenstein の前期の思想は、はやくから注目をあつめてきました。『論考』は衝撃的な著作としてうけとめられ、Carnap をはじめとする論理実証派は、一時期これを聖典のように扱いかねなかつたほどです。それに対して後期の仕事は、多様にとりとめがなく、つかみにくいと、ぶつう考えられています。それはその通りなのですが、後期の仕事は理解できないようであれば、はたして前期の仕事についても理解していたものやらどうやら、もういちど考えなおしてみたほうがよいでしょう。

わたしの考えは、こうです——Wittgenstein は、2回、すべてを賭けて戦いました。これは、かろうじて1回おのれの戦いをたたかいかどうかであくせくしている、並みのすぐれた知性にくらべて、おどろくべき驚きです。そして、その勝負はといへば、1回且なたしかに、彼は勝ちました。といへば、彼が意気揚々とひきあげたことから、わかります。2回戦では、どうも勝負がはっきりしません。彼はたたかいたなかばで、寝れます。勝敗の帰趨は、ゆいゆいの見極めるべきことです。これに對して、そのたたかひの大きさは、どうでしょう? 『論考』の作業は、掛け値なしに、第1級の大きさをもった仕事ですから。しかし、それにくらべてさえも、後期の“言語ゲーム”論は、途方もなく大きな仕事です。Wittgenstein は、『論考』の作業をすっかり清算したうえで(あるいは、清算すると決心したうえで)、この仕事にとりかかっているのです。彼にはそれだけの覚悟があり、彼の仕事にはそれだけの必然がありました。といへば、もしゆいゆいの理解がいまどくなら、Wittgenstein の後期思想をつかむことは、決してむずかしくはないはずですよ。といへば、前期の『論考』の立場からの逸出のプロセスとして見通すなら、すっかり辻褄が合うはずですよ。

では、Wittgenstein は、どういうところに、前期の理論のふしとまじみを見みとめるようになったのでしょうか?

\* 16

まず、はじめに確認しておいてもいいのは、前期、後期にかかわらず Wittgenstein の一貫した傾向なみとめられる、ということですよ。といへば、たとえば、言語(の用法)に対する治療的な態度にあらわれ、といえるでしょう。ことばづかいを正せば、思考も正される、思考を正すには、まず言語に注目せよ、という方針のことですよ。このような発想の根源には、思考と言語とはともをともなうものである、という暗黙の前提的な理解があります。こゝには、終生ついにくつかえさぬことになかつた大抵のようです。

言語と思考とが一体のものであるのなら、言語にさきだつてすでに事実的な思考の営みがどこかにあるわけでもなかるうし、またぎゃくに、思考の外側に、

実体的な言語のメカニズムがあるのでもないこととなります。したがって、思考を正しい秩序のもとで実現するためには、前期理論のように、言語の用法に関する厳格な形式化を追究する必要がある、生じます。そして、前期の写像理論とはなれたあとでも、哲学的な言説を秩序づけるはずの「哲学的な文法 philosophische Grammatik」を構想するとか、あらゆる思考や行為の秩序を与之る規則の束である「言語ゲーム」を発見するとかいう試みが、つづけられたのでした。

このような Wittgenstein の執拗なまでの試みは、あきらかに、彼自身の思想(思考)を自分でどうにか明晰に秩序づけておきたい、とするやみがたい衝動にかられたもの、とみることができます。彼はあたかも、自分の思考のすじみちを自分の思考によって境界づけ、内側からつなぎとめておく必要に、無意識のうちに追われているかのようです。

《われわれが生において死に取り囲まれているとすれば、われわれはまた悟性の健康にあって狂気に取り囲まれているのである。》(7:313)\*

Pascal の警句\*\*を髣髴とさせるこの言辭には、むづろのこと、圧倒的に強権的だった父のまをこつぎつぎに自死したる人の兄をもつ、彼自身の癡狂へのおそれとおののきが、最大限にこめられています。それゆえ彼は、今世紀もっとも大胆に理性の内と外と境界とを探索した、最初の知性となったのでした。

\* (7:313)と書いて、大修館書店版『ウィットゲンシュタイン全集』の第7巻313頁をいひする。以下同様。

\*\* Foucault の『狂気の歴史』の冒頭は、Pascal のことば、《人間が狂気じみているのは必然であるので、狂気じみでないことも、別種の狂気の傾向からいって、やはり狂気じみていることになるだろう》(Foucault 1972=1975:71) で始まる。Wittgenstein の「症状」は Pascal よりはるかにすすんでいて、それほど悠長に構えていられないので、遂にかえって、悟性を信頼しているかのような外見と口ぶりになっている。

\* 17

ところで、初期の写像理論の考えの中では、言語は、それ自身の固有の秩序をもたない、透明な媒介のごときものになります。なぜとていば、言語のもつ形

式は、すべて、世界の含む形式を(論理的に)写像したものにはすぎないのであり、一切が世界のなかにその根拠をもつこととなるからです。

言語と世界とが完全に符合する、というこの過激な写像理論は、ひとつの主体——世界の像を世界のなかでつくりだし、この写像関係をいちどきになりたせるような、世界の中心、あるいは、哲学的な主体——を、要請することになるでしょう。この主体は、世界のなかにある生ける主体なのではなく、世界のかたわらに世界とともにあって、世界のすべてを目撃する、仮構の主体です。言語と世界との完璧な一対一対応は、いわば、言語と世界とがいたるところ平行線を結んでいるようなものです。ことばのいみとは、そのような対応のことでした。そこでもし、ことばのすべてがいみを持ち、それらことばを使って、いかようにも、意味ある命題がつくられる(意味ある思考が遂行される)というのであれば、それら平行線はすべて、ある地点で交叉し、その地点から見通しを与えられなければならぬと言えざるはずで、ちょうど射影幾何学が、ありもしない1点(無限遠点)を追加して、議論を完結したものとするように、極端な写像理論も、自らを完結させるためには、仮構の哲学的な主体を必須とします。(写像関係という)平行線が交わるために、言語と世界とは無理やり彎曲させられ、そこに生ずる虚焦点のごときものとして、哲学的な主体があらわれてこざるをえませぬ。言語の全体を世界の全体へと結びつける思考の営みの中心は、この主体が位置するとされるのですし、またこの主体はひとつでなければならぬとされるのです。(さもないれば、思考の分裂を許けられないでしょう。) こうして、『論理哲学論考』の帰結が唯我論 Solipsismus を含意することになる理由も、はっきりしました。

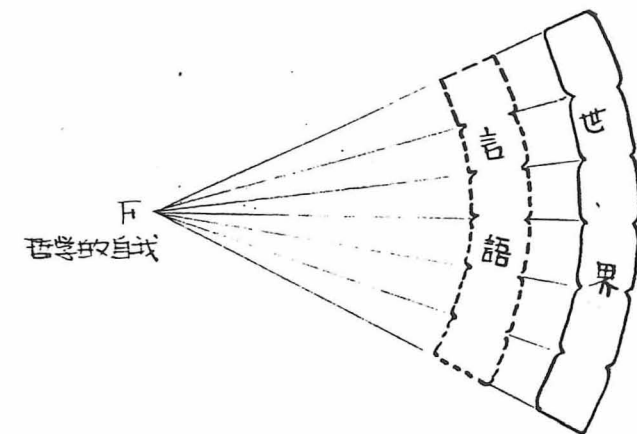


図17-1

このようなモデルは、過激でありすぎるゆえに、維持しがたいと言えます。そこで、このモデルが Wittgenstein の後期の思想のなかでどのように沈没するのか、主なモメントを拾ってその概をみてみましょう。

\* 18

はじめに Wittgenstein をおさったのであると思われる疑問は、要素命題のようなもの存在しないのではないかと、というポイントでした。

すでにテーゼ 4) として示しておいたように (p.16)、任意の命題が原理上、要素命題へと分解できること (要素命題から合成できること) だ、『論考』の柱のひとつです。前期の段階において、Wittgenstein は、要素的な命題が存在するであろうことを、かなり素朴に (ということとは、よくたしかめせず) 信じていた節がうかがえます。

《……無限に複合的な事態というのは不合理なものだと私には思われるのである!》(1:213)

《……我々が命題の本来の構造に近づくとする場合、我々の命題の構成要素は定義によって分解可能であり、また分解されねばならない。このことは明らかである。従ってこれらにせよ分析の過程が存在する。そこで、この過程はいつかは終るのか、と問うことはできないのか。……(中略)……定義の連鎖はいつかはまっとう終りとならねばならない。……(中略)……ところでわれわれの命題の意味は無限に複雑ではない。》(1:206f)

事實上有限な思考のプロセスが、世界を明瞭に思考しうるためには、言語も、また世界も、無限に複雑であってはならない、だとすれば、それらの有限な分析手続きが存在するはずである、つまり、これ以上分解できない要素命題が存在する——このような順序で、Wittgenstein は発想したと思われる。

しかし、Wittgenstein は、再度哲学研究を志して間もない1930年に、このような考えを改めたようです。1931年12月9日、彼はつぎのように Waismann に語っています:

《独断論的論述に含まれている……(中略)……誤りとは、それについてはい

ずれそのうち何らかの筈が見出されるところの、問が存在するかのようと思う、ということであり、この誤りは、私の本全体を貫ぬいているのである。……(中略)……かくして私は例えは、要素命題を発見することは、論理分析の課題である、と信じていたのである。……(中略)……私は、いずれそのうち人は要素命題を与えることが出来るであろう、と信じていたのである。昨年や、と私は、この誤りから解放された……》(5:261f)

また、1936年夏ごろのものと思われる断片のなかでは、つぎのようにのべています:

《『論理哲学論考』で私がやったように、人が「要素文」という名称を使いたければ、そしてラッセルにおいては「原子命題」がこれにあたるが、「ここに赤いバラがある」という文を要素文とよぶことができる。すなわち、その文は真理函数を含んでおらず、真理函数を含む表現によって定義されるものでもないからである。……(中略)……かつては私自身も「完全な分析」について語っていた。そのときの考え方によれば、哲学はすべての文を最終的に分解することによって、すべての疑問を明らかにし、誤解のあらゆる可能性をとりぞくものになければならなかった。あたかも、そのような分解を果たしうる記号操作の体系が存在するかのよう信じていたのである。そのさい私の念頭には、ラッセルが定冠詞に対して与えた定義\*のことがあった。それと同様に、例えは球の概念に対しても、視覚像その他を援用して定義することができ、そのようにして諸概念の疑問、すべての誤解の源泉、等々が決定的な形で示されるだろう、と当時の私は考えた。これらすべての根柢にあつたのは、言語の使用に関する理想化された、そして誤った観念であった。》(3:296)

\*この内容については、Eと文は Russel [1919=1954:218-236] を参照。

このような困難に対処する Wittgenstein は、いったい自分の位置を、どこに据えなおそうとするのでしょうか?

Wittgenstein は、思考が事実上有限であるから、それをなすに足る要素的なものがあるはずだ、と連断してしまっていました。しかし、有限であるからといって、ただちに要素に分解する手続きが存在する、と考えるしまうことはいけません。彼は、この点に気付きました。つまり、思考の営みが事実上有限であるという前提をあくまで維持したまま、要素命題の存在を否定することが可能です。(思考の本性と有限なものととらえることにこだわることは、まさに Chomsky と対極的です。Chomsky の生成文法のアイデアは、人間の能力を文の無限生成能力として理想的に抽象することを指しては、ありませんでした。)

この事情を見易く説明することになると思われる、面白い例をいれておきましょう。『哲学的考察』(1930)のなかで、Wittgenstein は、つぎのような図を掲げています。この図は、視空間において、可視的な最後の区別が存在すると考えることと、視空間の連続性が矛盾する、というパラドクスを解消してみせるための例示ですが、要素命題が存在しない理由と、ちょうど照応する例だとも言えそうです。彼は、こう言います:

《 この図形が示すような互に黒白の箇所からなる列を私が見る場合、分割を更に進めれば

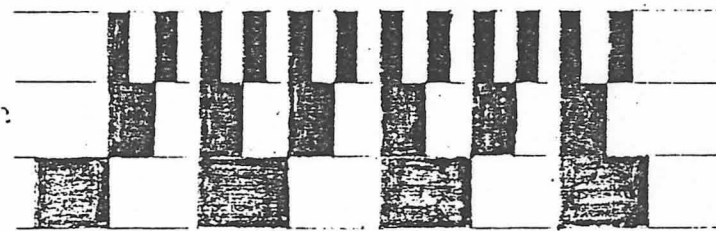


図18-1

もなく私は、黒い箇所と白い箇所をもはや区別できず、従って図之は灰色の帯の印象をもつことになる限界へ達するであろう。……(中略)……明らかに我々は区別可能な箇所からなる終りから二番目の列と、として灰色一色の終りの列とを構う。この最後の列において、それが本当に終りから二番目の列の分割によって生じたことが、一体見とられうるであろうか。明らかにそうではない。しかし他方、このいわゆる終りから二番目の列において、それが可視的にはもはや分割不可

能なことが見てとられうるであろうか。同じくそうではないと私には思われる。だがどうすると可視的に分割される最後の列は存在しないことになるのである。

線を走らば可視的には分割できない場合、この分割を試みることも不可能であり、それ故このような試みの不成功を見ることも不可能なのである。……(中略)……

我々の視野における連続性は、我々が非連続を眼にしないことに存している。》(2:202f)

ここで、この分解の手続きの終りから二番目の列が、要素命題にたとえられるものであることは、言うまでもありません。

要素命題への分解可能性(要素命題からの合成可能性)がなりたたなくなってしまうと、命題一般は、写像関係によって世界と結び合っているという仮定をうしなって、世界から取りなされ、虚空に浮かぶもののように考えられます。このため、Wittgenstein は、Saussure の言語学理に接近していくこととなります。

\* 19

さて、Wittgenstein は、要素命題に対して、それらが互いに独立であるという性質をも想定していました。この独立性もやがて、彼にはあやしいものとなるようになってきます。

前期にあつては、要素的な事態の成立/不成立は、互いに無関係な、独立なことからである、と考えられていました。

《 2.061 事態は相互に独立である。

2.062 ある事態の存立ないし非存立から、他の事態の存立ないし非存立は、推論されない。》(1:31)

もし独立でなくて、一方の事態の成立が他方の事態の成立に依存しているのだとすれば、はじめの事態は、(たとえ論理分析の手続きによって与えられたものであると) もはや「要素的 elementary」であるとはよべないだろう、と Witt-

genstein は考えたのでしょう。ですから彼は、同語反復 Tautologie にもとづく現象をのぞいて、濃縮的推論がありうることをみとめませんでした。

ところが、Wittgenstein は、『論考』の考之方では、当然、要素命題とみなされるような種類の命題が、互いに独立ではないような例を、みつけてしまいます。

《「要素命題」の概念は、いまや以前の意味を全て失っている。

----- (中略) -----

記述のための複数の独立な座標、という概念。例えば「そして」によつて結合される諸命題は相互独立ではない。それらは一つの像を形づくり、それらの連合可能性、不可能性が検査されるべきなのである。》(2:137)

《-----私は当時、すべての推論はトートロジーの形に基づいている、と思っていた。私は当時、推論は、或る人は二米である、それ故彼は三米ではない、といった形をも採らうる、という事をいまだ見ていなかったのである。このことは、要素命題は相互に独立である、即ち、或る一つの事態の成立から人は他の事態の不成立を推論することは出来ない、という事を私は信じていた、という事と関係している。しかしながら命題の体系についての私の今の所見が正しいとすれば、人は、命題の体系によつて記述せられるところの或る事態の成立から、それ以外のすべての事態の不成立を推論することが可能であるという事は、規則ですらあるのである。》(5:91)

たとえは彼は、色について、慎重な考察を加えています。「このバラは赤い」「このバラは白い」は、ともに要素命題にあたるでしょう。しかも、「このバラは赤い」ゆえに「このバラは白くない」、と考之るのは、われわれには自明な推論です。ということは、一方の要素命題の真偽が自動的に他方の要素命題の真偽を決定してしまうことも、いみするにちがひありません。これを、どう解すればよいのでしょうか？ Wittgenstein は、「このバラは赤い」、「このバラは白くない」が、決して同一の命題でもなく、さりとて互いに無縁な命題でもありえないことを確認したあと、つぎのように結論します。すなわち、この

種の命題は、互いにばらばらで独立したものではなく、むしろ、おのおのは座標にすぎないのであり、全体としてひとつの体系をなすものである、《そのような命題の体系全体が現実と比較されるのであり、一つの命題が現実と比較されるのではない》(5:90)、というのです。

《-----もし私が剣之ば、視野のこれこれの点は青い、<sup>青</sup>と<sup>赤</sup>言えば、私はただ単にその事のみを知っているのではなく、その点は緑ではない、赤ではない、灰色ではない、等々という事をも知っているのである。私は、色の序列全体を一度にあてがったのである。そしてこのことはまた、向政一つの点は同時に種々の色を持ち得ないが、という事の根拠でもある。向政なら、もし私が命題の体系を現実にあてがえば、それによつて——丁度、空間的対象の場合と同様に——常にただ一つの事態が成立し得、決して一つより多くの事態が成立し得ない、という事がすでに言われているのであるから。》(5:90)

このような見解は、『論考』の写像理論の考之方からの、大転換と言うべきでしょう。ここでは、「経験的なアフォーリ」がみとめられています。

色に関する命題が体系をなすのは、色がともとも体系をなすゆえだ、と考之られます。前期の、写像理論の考之方では、「赤い」ということはかみみをもつのは、それがさす「赤さ」の实体が、現実の世界のなかにをなわっているためである、ということになるはずで、それに対して、新しい考之方では、あるものが「赤い」と呼ばれるのは、そのものの「赤さ」のためではなく、そのものが色の体系(ものさし)に照らし、<sup>白</sup>「白い」とも<sup>黒</sup>「黒い」とも<sup>灰</sup>「灰色」とも<sup>緑</sup>「緑」とも<sup>青</sup>とも<sup>黄</sup>とも言えない限りにおいて、なので。つまり、「赤い」/「白い」/「黒い」/... という体系(Saussure 風に言えば、対立のシステム)がなりたっていることが、あるものが「赤い」とよばれることの妥当性の根拠を与えます。(これはもはや、いかなるいみでも、写像理論、とは言えません。)

ことばが世界に言及する仕方がこのような性質をもつのなら、ある成立するとされる事態の存立は、(その事態に先立って、別個な根拠でその存在をえている)ことばの体系と相関的な、相対的な事態でしかないことになるでしょう。

ここから、Saussureの記号の価値の理論(いわゆる、任意性の議論)まで、  
序人のひととびです。

ここで註記しておきますと、Saussureは、後期Wittgensteinの仕事に、少  
なからぬ影響を与えた、と考へられるようです。その直接の証拠は、これといっ  
てやり手になるだけのものがあります。いくつかの証拠に近いものはみつか  
ります。まず、「言語ゲーム」を論ずる際、各所でひかれる「チェスの例」。これ  
は、Saussureが、言語を実在と同一視する傾向に反対するためにあげた例として  
有名なものです。ついで、言語の任意性の原理。これは、Saussure言語論の中  
にもある概念ですが、Wittgensteinは、はじめの記号を任意willkürlichなもの  
とよび、のちには言語表現(2:55)や構文法(5:145)の任意性も主張するよう  
になりました。そして、体系の考へ方。色の語彙が体系をなすという発想などは、  
Saussureのものとも合わせて近いものです。さらに、"言語ゲーム"という  
着想自身が、ともとももってSaussure的である、と云うべきかもしれませ  
ん。こうして、Wittgensteinと、Saussure(および、それにひきつづく、構造主義運動)  
とのあいだには、み過すことのできない、内的な連続性がある、と予見でき  
ます。

\* 20

さて、このようにして、要素命題をたてる考へ方の基盤はすっかりゆらい  
でしまったのですが、ここで、直示的定義という仕方が改めて注目される  
ことになります。なぜなら、語の直示的定義 hinweisende Definitionによ  
って、写像理論はその基礎を得、上記の語批判にもさ、ゆがず延命できるか  
もしれないからです。しかし、いろいろ検討を重ねた結果Wittgensteinは、  
直示的定義によってことばのいみを与えようとする試みは成立不可能であ  
る、と最終的に論定します。

直示的定義とは、ある語の言及の対象を、個物のかたちで「このもの」と  
して持ちだしてきて、それをその語の意味であると定める、という仕方をい  
います。これは、語の指示作用をのこらず、本質的に言ってその固有名詞  
としてのはたらきに属するものだ、と言いましょ。ですから、直示的定義  
の考へ方にもとづく言語理解は、言語と世界とを写像関係にあるものとし  
てとらえるのですが、そのありかたは、Wittgensteinの『論考』におけ  
るような写像理論から

は、大きくへだた、ています。『論考』の場合には、16ページのテーゼ(3)  
のように、写像関係の存在が端的に主張される(だけな)のであって、その  
写像関係が改めて主題的に言及されることはありません。(それはとも  
とも、不可能である、と考へられています。) それに対して、直示的定義  
の与える写像関係は、外部から観察可能なものです。この写像関係は、  
定義という手続きによって与えられる規約的な性質のものであり、  
その関係の外部に基準をも、ています。ですから、この定義が厳密に  
実行できることがいえないと、直示的定義の考へ方は九脚点をうし  
ないます。Wittgensteinは、このポイントを衝きました。

直示的定義にちかいかような状況に、なるほどゆわゆわは出くわす  
ことがあります——たとえば、船の進水式での命名など。しかし、直示  
的定義によって言語のいみを説明しようとする考へ方が普遍性をも  
つためには、その定義が、いっは白紙の状態で、実行可能である  
ことが言えなければなりません。ところがこれは、実際不可能な  
ことです。おおよそいかなる直示的定義の場合でも、定義を  
与えるに先だつて、いままでなにを定義しようとしているのか、  
という点に関して、ある種の了解なり同意なりが成立している必要  
があります。ある個物を呈示して、「これをXXという」と定義した  
としても、いったいなにを定義したか、それだけを確認できる  
でしょうか？ その形をしょうか？ その色をしょうか？ それとも  
その用途をしょうか？——

《それゆえ、ひとは、語が言語の中で一般にどのような役割を果  
しているかがすでに明らかである場合には、直示的定義が語の慣用  
——意味——を説明する、と云うことができるだろう。だから、誰か  
がゆわたくしに色彩語を説明しようとしていることを当のゆわたくし  
が知っている場合には、「これを<セピア>という」といった直示的  
説明が、その語の理解を助けてくれることになる。----(中略)----

ものの名を問うことができるためには、ひとはすでに何かを知  
っている(あるいは、することができる)のでなくてはならない。》  
(8:38)

直示的定義をなしたたせるに必要な、事前の了解は、すでにことば  
のいみをもつような世界であるに、ちがいない——こうして、直示  
的定義による言語の基

礎づけは、失敗に帰してしまいます。直示的定義は、まったくのゼロからことばに意味と与えるものではありません。それには、それに先行する他の定義やルールが不可欠なのです。（これを、わたしの用語をのべるなら、言語は規範として存しているのに、直示的定義はたかだか言語行使にかかわる規範を実現するにすぎない、というふうに言えます。）

\* \*

直示的定義によって言語を説明しようとする試みの失敗は、どのあたりに原因があると考えられましょか？ ひとつの観点によれば、それは、普遍的なものである言語のはたらきを、個物の呈示による定義から基礎づけようとしたところにある、と言えるでしょう。語はたしかに、あれこれの個物に言及する際に用いられるようにみえますが、だからといって、語の指示する意味内容が個別的であるということにはなりません。それどころか、言語というものは、本質的に言、て、普遍的なものです。たとえば、どのような語でも汎用性もっています。（さもないければ、言語をもちいる理由はないでしょう。）

言語の普遍的な用法を、本来個別的な直示的定義によって、それぞれなんとかして基礎づけ、説明することはできないかと工夫するところから、標本 *Muster* という考え方も生まれてきます。ふたたび色の名を例にとりましょ。まず、白/黒/赤/… 等々の色の名は、個物である色見本に対して、直示的に定義が下されるとします。（この場合にも、それが色見本に対して与えられる定義である、との了解が欠かせませんが、一応この点は措くとしましょ。）そして、標本以外のさまざまな対象が色名によって言及される場合の妥当性は、すべてこの色見本を基準にしてたしかめられる、と考えるのです。たとえば、ある郵便ポストが赤いかどうかは、この色見本を参照したうえで、比較によって判定します。ですから、色見本を持ち歩いている場合に限って、ひとは色名を有意味に用いることができます。

— このような標本が存在すると考えることには、それなりの利点があります。（すくなくとも、利点があるように見えます。） 何より、こうした標本は、事物としてそこにあるという性質のものですから、色名を使用する場合の客観的な基準としてはたらくことができます。もしこうした標本（色見本）が利用

できないなら、各人は自分の知覚印象だけを手掛りにして色名を語らなければなりませんから、果して「赤い」と言っても皆が同じことをいみしているのか、…… 等々というた、きりめつきの難問がつきつき生じてくることになるでしょう。（実際、こうした難問、私的経験と言語との関係について等々という問題は、後期の Wittgenstein を悩ませつづけます。これについては、のちほどまとめて論じることになります。） このように、すべての言語行使の背後に、そのための基準となる個物（標本）をおくような仕方を、いうならば、言語のメートル法とよぶことができます。Wittgenstein は、こうした言語のメートル法を、ありえないメカニズムとして無下に存けるようなことを、していません。可能な言語用法のメカニズムとして承認しています。彼がみとめないのは、言語のメートル法が写像理論を基礎づけるのではないかという見解です。その理由を直截にまとめてみるなら、こうでしょう——言語のメートル法をなしたたせる原器——色見本なり、標本なり——は、語の意味の外的な規準を与えるようにみえるけれども、決してそうではない。標本が規準としてはたらくのは、それがまさに標本であることが、ひとびとに承認され、すでに知覚にまぶっている場合に限られる。すなわち、標本は、決して言語の外にある実物（言及の対象）なのではなくて、むしろ、言及のための制度の一部、言語メカニズムの一部である——。

《 -----私は、直示的定義においては、範例（手本）については何ひとつ語らない。私はもっぱら範例の助けを借りて言明を行なうにすぎない。範例は記号体系に属し、記号体系が適用される対象の一つではない。》 (4:154)

こうして、標本が言語の規準とはなりえないことがわかったのですから、標本を介して言語と世界とを結びつけることも、できないことになりま。標本をたててみることによって、直示的定義が与えるかに思われた言語と世界とのあいだの写像関係を再び基礎づけるおまじうとしても、それは適わないことが明らかになりました。

このような思案を経て、Wittgenstein は、前期の写像理論から決定的にはなれま、ていま。ま。



\* 21

以上これまでの考察（\*18 - \*20）によつて、写像関係は言語のいみを与えるものではない、と Wittgenstein は考へざるをえなくなります。では、ことばをいみあるものとしているのは、写像関係（世界との対応）でないとしたなら、いったい何でしょうか？

直截に言えば、こうなりましょう——ことばのもついみは、それが言及する「世界」の側から与えられるのではなくて、それが行使される「メカニズム」そのものによつて与えられるのです。そのようなことばの運用のきまりを、彼は文法とよびます。

《 文法におけるひとつの語の場所が、その語の意味である…… 》(3:70)

《 意味の説明は、語の使い方を説明する。その言語におけるその語の使い方が、その語の意味である。 》

文法は、その言語におけるさまざまの語の使い方を記述する。

したがつて言語に対する文法の関係は、あるゲームに対するそのゲームの記述、つまりそのゲームの規則、の関係に似ている。》(3:70-71)

（実在的な）世界から切りはなされて、なおかつ有意義に使用される言語は、それ独自の秩序——文法——を持たなければなりません。この文法は、広いみで、ゲームの規則に相当します。

このように議論が転回していくならば、われわれはふたつの疑問を抱くことになつても不思議はないだろう、と言えます。まず第1は、このような文法（ないし規則）の本態は何であるのか、という疑問。第2に、言語や思考と、世界や事実とのあいだの調和をどのように考えようとするのか、という疑問。言語が単なる世界の影名めではなく、世界の自立した一契機であることに気付く以上は、こうした疑問に背を向けることはもうできないのです。

\* 22

世界と言語とを結びつけていた写像関係が<sup>ほころ</sup>経びるようになると、その一方の極（言語の側に結ばれる虚焦点）であつた（哲学的）主体もまた、初期の唯論的構図の安寧から揺りおこされてしまふでしょう。ここで主体（主観）の概念が根本からくつがえされます。はじめ主体は、言語の写像関係を成立させるような、<sup>ステイフ</sup>静態的な哲学的主体にしかすぎませんでした。それにかわつてここでは、言語にその意味を与えるものである、用法の主体、すなわち、規則にのつて言語を行使する主体が、登場してきます。（このように言語と不可分であるような主体という考へ方は、新批評などを経過したわれわれにとつてはもはやもの珍らしくはありませんが、Wittgenstein より以前にはそれとしてとりあげられることさえもせよした。）

ここでまず問題になるのは、わたしの用語でいえば、人称構造——言語行使の主体を中心あるいは非中心とする自他関係の構図——であると思ひます。初期の写像理論では、当然のことに、この固有の人称構造は言語から脱落しておりました。そこで、分析可能な客観的世界というものがはっきりした輪郭を所たなくなつてしまひ、かわつて言語行使の主体が登場してくるにおよんで、たとえばつぎのようなタイアの発話に Wittgenstein が注目し、こだわりつづけることになつたのも、当然だと言えるわけです。

彼がこだわつたのは、「私は歯が痛い」というような、私的経験にかかわる発話です。このような発話は、言語に属するものでしょうか？（誰がみてもそう見えます。） そうだとすれば、この発話はいったい、どのような意味をもつのでしょうか？

\* 23

非常な紆余曲折の末、Wittgenstein の徹底してやまぬ考察がたどりついた結論は、つぎのようなものでした。すなわち、「私は歯が痛い」というたぐいの発話によつて、われわれはけつして、私的（極私的！）な体験を他者に報告するということをしてゐるわけではない、ということだ。

通常の（通用的な）考へ方によると、われわれはめいめい、〈歯が痛い〉という体験を、確固としたものとしてまぎらつてゐます。こうした体験は、言語に先立って、（言語とは独立に）われわれの内面を構成してあります。そして

そののちに、言語という慣習的な制度に頼って、それを「私は歯が痛い」というふうなスタイルの言表として、発話し、他者に伝達したりすることができる、というわけです。ところが、このように我々で通用的な言語理解は、徹底した批判に到底たええません。

「歯が痛い」という言明は、そのとに、対象的な言及可能な領域をもっていません。すなわちこの発言のいみも、写像理論派にあるべきこととの対応において理解することは、できない相談なのです。これは奇妙に感じられることでしょうか、しかし論理必然的な帰結です。もしこの種の発話において写像理論の権限を維持しようとするれば、(いまや主体は沢山の語る主体(「私」)のあいだに分裂してしまっているのですから)ことばのいみは本来的に成立たなくなってしまう。(たとえば他者が各自を「私」とよぶことからして、いみはあっさりしなくなります。)

こうして、各自の内面を相互に伝達しあうような言語は、成立不可能です。内面に限っては、外界のべきことの場合にもちだした色見本のたぐいを採用すること、できません。なぜなら、《サンアルの同一性に対する通常の「判別」基準がこの「私的経験の」場合には通用できないから》(6:333)です。そこで Wittgenstein は、われわれの常識を支配している発想の転換を仕向けるように、強いられます。つまり、われわれは、言語ゲームに奪まわれる限りにおいて、私的経験をそれとして扱おうとするのだ、と考えてみるのです。私的経験を報告しあうという言語ゲームだけがある、とするわけです。

《「歯痛」という語を使って我々が行なうゲームは、我々が歯痛の表現と呼ぶ振舞が存在することに全部依存している。》(6:336)

《「では、私は赤ん坊のとき『歯痛』とは歯痛の表出のことだと習ったというのか」——いや、私が習ったのは、或る種の振舞を歯痛の表出と呼ぶということである。》(6:341-342)

《一つの体に棲むエゴという観念は捨てられねばならぬ。》(6:320)

(最後の引用文が、Descartes とその伝統からの記別宣言のひたりになっていることに、注意しておきましょう。)

\* 24

ここで示されたのは、伝統的(正統的)な主客図式に対する根底的な揺かし/質かさいです。Wittgenstein は、《世裁論と向から向まであバニバになつてゐる哲学》(6:321)を構想しようとした。そして彼は、唯我論的な主体とともに、この主客図式そのものまでも、湯船の水と一緒に押し流してしまつた、と言ふことができるでしょう。(ちなみに、西歐思想の運命を、アラトニズムに対するヘスライズムの異端支配(指図)と、かりに概括することが許されるなら、Wittgenstein というユダヤ的知性が、この哲学的断層においてもそのひとつの要頭をあらわしている、と考へてもさしつかえないかもしれません。このヘスライズムの現代的諸形態として、構造主義があり、社会学主義があり、その他脱類式的諸流派がある、というわけです。) 主体はもはや、言語のうしろにドンと控えているものではありません。かえって、言語の営みのあいだでようやくその態をなすようなものなのです。

\* 25

いま、私的体験の報告に関連させてのべた転回が、それ以外の言語行為についてもあてはまるのは、当然のことでしょう。意図であるとか、予想、記憶、命令、願望などは、いずれも、言語によってうみだされるたぐいの、私的なべきごとです。これら、われわれの言語の営みに付随するさまざまな人間的行為は、言語を成立させる諸規則のなかではじめてそれとしてあらしめられているということが、同様に Wittgenstein の検証によりたしかめられます。彼のこうした作業は、とりとめのない、一見きわめて散漫な印象を与えます。しかしそれは、日常言語の論理や作動を明らかにするという、日常言語に関する経験的研究なのではなくて、ほるかに深刻な含意に導かれたものです。すなわちそれは、われわれが言語ゲームに深く奪まわれ、その外側にはいかなる言語的活動の余地をも持っていないこと、われわれの主体性が言語をばなれたその外側には存在しえないことを論証しつくさんとする試みの、一齣一齣にほかなりません。これらひとつひとつの言語ゲームが言説(≒思考)の主体をうみだしてしまふ。発話のひとつひとつは振舞いであり、それがゲームの規則によって秩序づけられ、その秩序のなかに、統合的なものとしての主体がかすかに示されてく

ることになるわけです。

Wittgenstein が身をもって演じたように、伝統的な主客図式にのっとったま  
ま言語と世界とを整合的に考え返そうとする試みは、かならずとつしようもな  
い階層に直面する、と言えます。しかしそこから脱する途がただひとつ、言語  
(ゲーム)をいわは新しい(超)主体として発見する、という仕方に限られるわけ  
ではありません。メタ理論のような、言説の階層性を承認するならば、主客図  
式を保ったままに、いくらでも矛盾をのこせることができる——よくとも、そ  
うみえます。むしろ大方の論者は、そうした行き方を暗々裡にどこかで採用し  
ていると考えられます。しかしこれは、Wittgenstein のとるところではありません  
でした。なぜならこれは、語る主体を無限的に後退させてしまい、逃げ  
木のように空疎で抽象的な哲学的主体をどこかにうむだけであって、決してこ  
の世界とこの言語に責任をとろうとする態度でない——たぶんそう、彼には思  
われたからでしょう。彼は卑怯を憎み、向ものからも逃れしようとはしない人  
です。そうした率直な大胆さが、彼を言語ゲーム論人としむけます。

\* 26

言語はこうしていまや世界とは区別され、世界とはまた別の固有秩序をもつ  
ことになりました。これでは言語はどのようにして、これとは異なる秩序をも  
つ世界にかかわり、世界へと言及し、その真理を表明できるということになる  
のでしょうか？

世界の秩序は、言語のなかでは、仮説として組み立てられるだろう、と言え  
ます。

◀ 仮説は命題を形づくるための法則である。

仮説は予想を形づくるための法則である、と言ってもよいであろう。

▶ (2:389)

すなわち、言語は世界と相即することがア priori に定まっていたりするわけ  
では、いかなるいみでも、ありません。言語的メカニズムは、それ自体の性能  
によって、世界へと向かっていくのです。ある途中をめぐってこのメカニズム  
からくりだされるのが、予想を担った個々の命題であるというわけです。言語

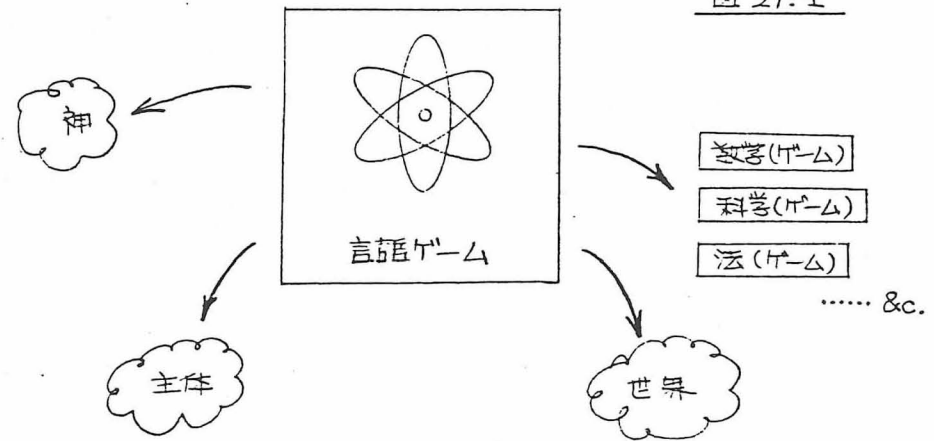
のメカニズムは、このように世界にかかわる人間の振舞の実態をなすEのです。

\* 27

このように後期の Wittgenstein にあっては、言語が世界と拮抗するに足るだ  
けの実在性を獲得する、と言えます。いやむしろ、言語は、人間に対して、く  
らべるもののないほどの現実性を与えることになった、と言ってもよいでしょ  
う。言語ゲームとは、そのような至高の現実性のことです。こうした言語(の  
メカニズム)によって、われわれのしる主体も、また客体(すなわち世界)も、  
われわれに与えられるようになるのです。言語ゲームが、すべての実在をつく  
りだします。

われわれのしるすべては、言語ゲームによって作りだされます。すべては  
言語ゲームであるのです。(これを、創造神の今日的形態とみたてることも、  
あながち的外れではありません。)

図 27.1



\* 28

言語ゲームはわれわれの生活がまさにそうであるように多種多様ですから、  
さまざまな特殊なゲームを含むことになります。数学のような純粋な一領域も  
また、あるひとつの言語ゲームを構成する——当然にも Wittgenstein は、こ  
う考えることになります。これでは、数学は、言語ゲームとしてはどのような特  
異な秩序をとなえている、と考えられるのでしょうか？

伝統的な理解によると、数学は、われわれの存在や世界にも先行するような、特別の領域でした。そのことは、Kant の先験的論理学の考え方をみても、また、論理の上位階級をみとめる主流の論理研究の考え方をみても、明らかるところです。それに対して、言語ゲームの考え方は、こうした特別の領域や上位階級といったものを、決してわれわれの活動のなかに認めようとはしません。すべてを、言語ゲームという同列水準にひき下ろすつもりです。彼は言います。

《 数学の内部ではすべてのものが算法(アルゴリズム)であり、いかなるものもその指示対象をもたない。われわれが言葉によって数学的事物にたんに話しているように見えるため、それが指示対象をもつと思える場合でも、ちがう。われわれはそのさしむしる、まさにこれらの言葉によって、ある算法を構成しているのだ。》(4:332)

《 算術は数の文法である。数の種々の種類に關係する算術の規則のみが、数の種類を区別できるのである。》(2:165)

《 算術は数について話をするのではなく、数で仕事をするのである。》(2:165)

《 数学は計算であり、したがって、本質的にいかなるものについても扱わない。それゆえ、メタ数学は存在しない。》(4:79)

Kant に対する批判的考察としては、たとえば、(2:146)をみてください。

\* 29

ところで、20世紀初頭以来、数学界の主流をなす議論においては、数学の公理的な基礎づけが、ひとつの中心的なテーマとなっておりました。Cantor 以来の(素朴)集合論は、さまじまの管理にみまわれましたが、それはRussel 流のタイプ理論によって、一応補正されることになります。また、この関連から、数学的体系が矛盾を生じないものであるのか否かが突っこんで検討され、Gödel の不完全性定理という形で終着します。(これはたしかにわれわれにある解決を与えましたが、その解決とは未解決なものをいつものこしておくとい

うこととほぼ等しいのですから、見方によってはほなほな絶望的な終着です。)ところが、こうした大方の議論の流れに対してWittgenstein の言語ゲーム論が示した態度は、やや特異なものでした。彼によれば、数学の現代的再構成をめぐる議論は、いずれもナンセンスにはかたまりません。なぜなら、これらの考え方というのは、数学を、ある言及の対象(数学的对象)をもつもののように想定しており、それに対して言及しようとする記号体系をなすものとして、数学を理解しようとしている点で、誤っているからです。

Wittgensteinによれば、数学的对象というものは存在しません。数学は、純粹なことばづかいの体系です。たとえイデア的なものとしてであれ、いかなる数学的对象というものも存在しませんし、もちろん、無限ということもありません。数学的帰納法も、無限公理も、いわんや無限集合論も、すべて誤解の産物であるというのか、彼の結論です。無限は、実在するわけではありません。ただ、われわれによって志向的に無限であるとみなされているという事態があるだけなわけです。

ちょっと注言すれば、この「対象の実在を指定する志向性」という考え方には、Husserl からの透からぬ影響がみてとれるように思われます。両者の直接的な交渉の有無(あっても不思議はないが、充分なかつたろう)はともかく、その仕事は互いに驚くほど近接してあります。ことに数学批判に関して、Husserl の『幾何学の起源』(1936年稿、1954年刊)——これは、Gödel の定理や非ユークリッド幾何学の発展を(多分、本質的でないという理由で故意に)無視したうえで、幾何学(ないし数学)の生成と展開を、生活世界という根柢的な出来事と前提にした間主體的な波及(≒歴史)として描述しようとする書物です——と、数学=言語ゲーム説とのあいだには、瓜二つと言っていいほどの共通の着眼がみとめられましょう。この内実と含意を明るみに出すという作業も、興味あるテーマのひとつに思われます。

\* 30

Wittgenstein の数学=言語ゲーム論は、きわだって反ラトニズム的であります。彼のような極端な立場はふつう、厳密有限主義とよばれます。(もちろんこのような立場にたつ人は、まったくの少数派です。)

《 集合論は、存在している（そしてこれのみが可能な）シンボル体系に代えて存在しないシンボル体系を見かけ上前提するが故に、誤っている。それは仮想的なシンボル体系、従って無意味なこと、の上に構築されている。》(2:283)

《 全ての命題や全ての関数に関わる命題は、もともと不可能である。》(2:194)

《 ひとはあるもの——存在——を証明することができる。その結果彼は、証明とは独立に、その存在を確信してしまう。（たがいに独立した——したがって定理からさえも独立した——証明という概念！）実際に存在とは、われわれが「存在証明」と呼ぶもので証明したそのものにほかならない。》(4:196)

《 われわれは、存在証明にかんする自分たちの概念と切り離して、存在の概念をもつことはない。》(4:197)

つまりそれは、（たとえイデア的にであれ）存在する数学的対象それ自体の存在を一切みとめず、それをただ、われわれのゲームのたわむれのなかでうみだされる仮説的対象としてだけ、みとめようとするものなのです。

数学を方法論的に批判する試みのなかで通常もっとも過激な立場と考えられているのは、L. Brouwer らによる「直観主義」でしょうが、Wittgenstein はこれに対してもまったく批判的です。それはたとえば、(4:196) をみればよくわかりますが、要するに、彼らもその批判の対象となっている人々と同じで、実際の証明も実行してもいないものを証明とよんでいるではないか、ということのようです。

\* 31

Wittgenstein の議論はどのように受けとられているのでしょうか？ 論旨のなかには、"Wittgenstein は、Gödel の定理をよく理解していないんじゃないか？" などと言う者もいて、一般に評価は芳ばしくなっているようです。また、彼の主張をうけいれると、われわれは、現在われわれがしているような、実数論も、

無限集合論も、解析学も、位相論も、……つまり今日「数学」という名のもとに一括されている内容のほとんどすべてを、失ってしまうことになる、ということもあります。ですから彼の主張は、教養者にとっても、数学基礎論者にとっても、格別有難い内容だというわけではありません。

しかし、Wittgenstein の厳密有限主義が、論理一貫した整合的立場である（ことができる）かどうかということは、以上の事情とはまた別のことです。したがって、彼の主張を内在的に理解しようとするなら、数学者の反感をすべて割引いて考えねばなりません。そしてわたしは、Wittgenstein の立論でも、（数学を基礎づけるかどうかは別として）いっしょに行けように思えないではありません。

《 ----- 私の思うに、もし数学のゲーム規則に矛盾が現れるとしても、救済手段を講ずるという事は、この世で最も単純な事である。即ち、規則同士が矛盾におちいった場合に対し、我々はただ一つ新しい規則をたてればよいのであり、そうすれば事態は解決するのである。

しかし今や私はここで或る重要な注意をしておかねばならない。それは、矛盾は、それが現にそこにあるとき、そのときのみ矛盾である。という事である。人は、あたかも誰も見ていない矛盾が始めから公理には潜んでいる可能性があるかの如く、思っている。----- (中略) -----

私の思うに、いつか推論は矛盾に到ってしまわないであろうか。と問うことは、その矛盾を見つけ出す方法が私に与えられていない限り、全く無意味なのである。

私がゲームをすることが出来る限り、私はゲームをすることが出来る。そして、すべては整然としているのである。》(5:170)

このように彼は、矛盾に関して、きわめて樂觀しておりましたが、それが厳密有限主義のなせるところであるのは、明らかです。彼は、数学が、本質的に開かれたものであり、つねに逐行中のものであると考えました。数学は閉じた体系ではないのですから、その体系に付随するとされるような無矛盾性を願望する要もない、というわけです。（もっとも、彼の立場が本当にいともたやすく

矛盾を処理してしまえるものなのかどうかは、いちどよく考えなおしてみる方がよいかもしれません。)

\* 32

Wittgenstein はそれでは、論理や数学についての精緻な問題、すなわちその普遍性や強制的な性質を、どのように考えていたのでしょうか？

彼によれば、論理とは、言語ゲームに関する記述です。言語ゲームに関する記述(の内容)は、言語ゲームを外的に拘束するようにみえます。しかし、論理が言語ゲームを拘束すると考えたのでは、話がアベコベである、と彼は言うでしょう。

「数学的対象」は存在しないのですから、そのような数学的対象に関する仮説として数学を営もうとするわけにはいきません。これが経験科学のように何かある経験的な対象を扱う仮説系であるというのなら、その仮説系を組み立てるための勝手なルールとして、どこかから論理をひっぱってきたとしても、筋は通るでしょう。しかし、そうではないのですから、数学やそれをなしたせる推論(証明)を、なにかアオリオリな「論理」で基礎づけることは、できません(まったくいみをもたない試みです)。では、数学や論理をそれとしてあらしめているものは、何でしょうか？ そこに、社会的な根拠としての、習慣、生活、制度への目配りといったものがうまれてきます。

《 論理的法則はもちろん〈思考習慣〉の表現である。しかし、また思考するという習慣の表現でもある。すなわち、それは人間がどのように思考するかを示すが、また、人間は何を「思考する」と呼ぶかをも示す、といえる。》(7:92)

《 …… どの証明も特定の記号使用人のいわば信仰告白である。》(7:166)

《 …… なぜ私がそれ(=証明)を正しい推論として承認するかということの根拠は、証明の外にある。》(7:167)

《 証明も、このように(注)メートル原器が制度の一部であるように)制度の一部ではないか。》(7:162)

《 …… 数学はどうせ人類学的現象なのだ …… 》(7:357)

《 論理的推論とは、ある特定の範例に従えば正当化されるが、その正当性は、他の向ものにも依存しないよう移り行きである。》(7:384)

《 数学は規範の網を構成する。》(7:384)

ここで、「習慣」「告白」「外」「制度」「人類学的現象」「規範」などの用語に注意してください。ことに、「告白」「外」「制度」はほとんど Foucault を準備するような形で用いられている点が、注目に値します。

\* 33

論理は、それ自体として存在できるような実体的な秩序ではなくて、あれこれの言語ゲームの属性であると主張しました。ですから、論理そのものを対象的にとりあげ記述することは、できないと考えられるでしょう。

《 言語ゲームの記述は、ことごとく論理学に属する。》(9:22)

《 私は、「論理は結局記述されえないものである」という主張に、ますます近づいているのではないか。言葉を語る営みを注視せよ、そこに論理が看取される。》(9:126)

どのような論理にも、かかわらず言語ゲームが先行しています。ことさら論理を語りださなくとも、それはすでに、言語ゲームとともに実現されています。論理は言語ゲームを基礎づけるだけの資格をもっていません。言語ゲームが、すでにとにかく営まれている、ということがまがあるだけなのです。

\* 34

こうして、彼の言語ゲーム論は、ますます社会(科)学の領分に接近していくように見えます。それは、あるいみでは、文化の祖姓主義であり、文化(固有の人間領域)がいかなる基礎づけも与えられないまま宙空に浮いていく、という酷薄な認識であり、構造人類学の失脚であるとさす考えられないわけではありません。

Wittgenstein の言語ゲーム論に関する注目すべき影響関係を整理するならば、

つぎのように書けましょう。

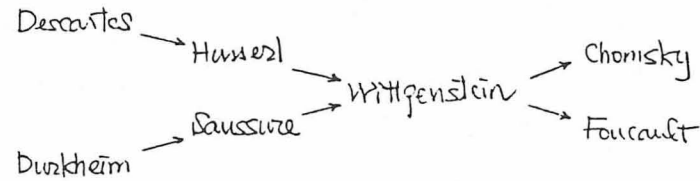


図34-1

Chomskyとの関係についてだけ、少々注記しておきましょう。Chomskyの生成文法のアイデアは、基本的に、Wittgensteinの仕事のなかにみつけられる、と言うこともできそうです。なぜなら、Wittgensteinは、Chomskyの基本的な発想——可能な言語をうみだす文法、語りうることの真部分集合としての言語、その内側からの境界がけとしてのアルゴリズム、等々——を、すでに駆使しているからです。Wittgensteinがこうした議論をすすめていたため、ひとつの地平が用意されたわけで、そのいみではChomskyはWittgensteinの圧倒的な影響下にあります。もちろん、Chomskyは厳密有限主義を採らないで集合論に依拠するわけですから、相違点はいくらかもみつかります。しかし、両者が、言語に注目することを手掛かりに、今日の近代的理性の告座をすらすらとこころに思想の生命をえている点を、互いに交差するところがあるといえましょう。この2人のユダヤの知性のあいだに、予期以上の交差点をみつけたていくというのも、興味ぶかい主題だと言えます。

\* 35

こうして、言語(ゲーム)を秩序づけるものは、「習慣」「制度」「規範」……と規定されるに至りました。つまり、なによりも現実的なものである「言語ゲーム」はまた、社会的なもの、そのものでもあったわけですから。このようなく社会的なもの、言語ゲームの本態を、Wittgenstein自身は、みずから、生活形式 Lebensform とよんでいます。この用語にわれわれは、Husserlの影をみてとることもできるでしょう。われわれが現におこっている生活の形式、このDurkheim的ないみでの社会的な事実が、数学を含め、われわれの思考や主体性や社会制度のあらゆる現実性とうみだす根本メカニズムである、といわれたわけですから。それは、社会的現実の生成器と言ってもいいでしょう。わ

れわれの日常言語や日常生活は、このときWittgensteinのなかで、至高の現実性としてのいみをもちはじめています。それが、もっとも基本的な言語ゲームのまとまりであるからです。

\* 36

ところで、日常言語や日常生活に対する目配りは、急にあらわれてきたわけではなくて、はじめからWittgensteinの議論のなかでそれとして然るべき位置を与えられておりました。(つまり無視されていたわけでは、ありません。)初期現象論のなかでは、つぎのようにのべられています。

《 Ⅲ.00 = ..... (中略) .....

日常言語は人間という有機体の一部であり、そしてこれに劣らず複雑である。

日常言語から言語の論理を直接読みとることは人間には不可能である。

言語は思想に変装を施す。即ち、衣装の外的形式から装われた思想の形式を推論することはできない。何故なら衣装の外的形式は肉体的形式を認識させるのとは全く別の目的に従って形づくられているからである。

日常言語の理解のための暗黙の取り決めは非常に複雑である。》(1:45)

《 私は日常の命題の曖昧さを正当化したいだけである。というのをその正当化は可能だからである。》(1:248)

彼が言いたかったことは、こうでしょう——日常言語 Umgangssprache は、たしかにじゅうぶん秩序だったものであるけれども、論理的な要請以外の夾雑物によってあまりにも複雑なものにふくれあがっている。だから、抽象による理想化を施さないかぎり、その論理関係をつかみとることはできない——。「論理哲学論考」こそ、このような抽象化の産物でした。そこでは、われわれの行使する言語の向こうに、それとは別個に論理的な世界の存在することが、まだ信じられていました。

\* 37

しかし、初期理論ふうの抽象化、理想化が失敗したあとで、そのような試みは放棄されて、日常言語、日常生活それ自身が中心的な位置を占めるようになります。後期の理論では、日常言語と理想言語との区別はなくなり、すべてが家族的類似をもつひとくさりの言語ゲームに帰するものとして、同等に考察されます。それらはひとしく世界を描出する、いやむしろ、世界を形づくっているわけです。

《 私は以前には、通常我々みんなが使っている日常言語と、我々が現実を知っているもの、従って現象、を表現するところの基本的言語とが存在する、と思っていた。私はまた、第一の言語体系についても、第二の言語体系についても、語ってきた。私はこれから、なぜ私はこの考えについてもはや固執しないのか、詳しくのべようと思う。

私が思うに、我々は本質的にただ一つの言語を持っているだけである。そしてそれは日常言語である。我々はまず初めに、或る新しい言語を見出す、あるいは或る記号法を構成する、という必要はない。そうではなく日常言語は、我々がそれに付着している不明確さを取り去ってしまえば、すでにそれこそまさに言語なのである。》(5:61)

《 ……言語において人間は一致するのだ。それは意見の一致ではなく、生活様式の一一致なのである。

言語による意思疎通の一部になっているのは、語彙の一致だけではなく、(非常に奇妙に響くかもしれないが) 語判断の一致である。》(8:176)

《 ……根拠を求める営みには終点がないかのようなのである。だが、根拠なき行動様式、それが終点なのだ。》(9:35)

《 人間の行動はどのように記述できるだろうか? だが、色々な人間の行為について、それらが互いに入り組んだ仕方で群がっている様を描写することによってである。ある人が今為したことや、個々の行為ではなく、人間の行為の群れの全体が、すなわちわれわれが個々の行

為をその下にみいとらえる背景が、われわれの判断、概念、反応を決定するのである。》(9:352)

このようにとらえられることになった言語ゲームは、それとさらに別のものによつて説明したり根拠づけたりできるといったものではなくなってしまい、ただすでにここにあつてしまつていてという端初的な事実性そのものとしての姿を現わしている、とみることができます。

\* 38

言語ゲームの考え方は、当初は、Wittgenstein が自分の思索と初期の思考経路からずらすためにことさら用いただけの、仮設的な概念と言つてもいいようなものでした。しかしそれは、彼の思索のなかでどんと人跡らんごしだいに大きな場所を占めるようになってゆき、とうとうしまいに彼の思想全体を呑みこんでしまった、とも言えます。言語ゲームは、それが社会的なものであるという実態を徐々に明らかにしていくのですが、そうするとついに「言語ゲーム」という名称のもとには収まりきらず、「生活形式」、「行動様式」と呼びかえられたりもするようになってゆきます。

われわれは、そのような生活形式のアイデアに、Wittgenstein のうちに潜む Durkheimist の趣をみることもできるかと思ひます。たとえば、集合性や集合的な主体に関して、ほとんど Durkheim に接近するつぎのような言明を陳べていることもできます。

《 幾人かの人びとが、ある一つの意図をもち、それを実行に移すのだが、彼等の一人一人はその意図をもちてはいない、ということと想像することはできないだろうか。このようにして、政府は、誰一人としてもない意図をもちうるのである。》(9:193)

主体の概念が言語ゲームに吸収されたこと、言語ゲームの実態が社会的なものであること、を考へ併せると、このように集合的な過程がある(集合的な)主体を結ぶと主張されるようになるのは、むしろ当然でしょう。



言語ゲーム論は、どのような批判意識と結びつきうるでしょうか？

言語ゲームという理解は、われわれのしる（社会的）現実をすべて相対化する絶対の外部のようにふるまいます。そこから、もっとも根本的な批判がみちびかれる、という仕組みになっているようです。こうして言語ゲーム論は、普遍的な相対主義へと逼ります。

《一つの言語ゲームに属することが一つの文化全体なのである。

》(10:142)

《……異なった時代には全く異なったゲームが行なわれる。》(10:142)

《時代の病気は、人間の生活様式の変化によって癒される。……(中略)……

自動車の使用がある種の病気を発生させ、促進する、そして人類が何かの原因から、何かの発達の結果として、自動車に乗る習慣をふたたび棄てるまで、この病気をわづらう、と思ってみよ。》(7:119)

言語ゲームは向ものかを基礎づけるということはない、向ものかに基礎づけられるということはありません。そのいみでは、全く恣意的です。ですから、ある言語ゲームを廃止したり克服したりしようとする場合には、それを上回る言語ゲーム（たとえばより興味ぶかい言語ゲーム）を創案し、流行させるということになるはずです。そのようにすれば、人はどのような個々の言語ゲームの外へも、出ることができるよう。（ただし、言語ゲーム一般の外へ出るというようなことは、多分ありえないはずです。）

このような Wittgenstein の理解が、どれほど構造人類学や文化の系譜学と近い考え方であるかは、実に驚くほどです。

言語ゲームは向ものにも基礎づけられないものだ、と言いました。このことば、Wittgenstein のなかで、哲学的な思索のいみを完全に転倒させてしまします。哲学的な懐疑というものに対する決定的な否定が、彼の最晩年のノートである、Moore に対する批判のなかで見ることができるようです。

Wittgenstein は、哲学的な懐疑の特徴とみとめません。哲学的懐疑といえども、哲学的懐疑という言語ゲームのうみだす態度の、別名でしかないので。そして、哲学的懐疑は、哲学的懐疑の言語ゲームの規則に従わなければならないでしょう。さらに、哲学的懐疑を支える言語ゲームはまた、ひるがえって、日常言語という言語ゲームにおびきかたれているのです。もし哲学的懐疑をなりたいにしている規則すら疑うような、散乱しきった思考があるとするは、そもそも懐疑という営みを継続することもできません、というわけです。つまりこれは、少しも懐疑ではありません。こうして彼は、（初期理論とは別な方式によってではありますが）哲学的懐疑の外側へとほとんど抜けでております。

Moore の出発点は、つぎのようなものでした。

《ここにひとつの手があるということも君が知っているのだから、

それ以外のことについてはすべて君の主張を認めよう。》(9:7)

懐疑論者に抗して彼が確保しようとした地点とは、すくなくともひとつの確実な日常的知識が存在する、という事実です。これを足がかりとして、彼は確実性の領域を広げるべく、出撃をはかるとのことです。

Wittgenstein は、このような知識が確実なものではないとは言いません。もちろん、ここにひとつの手があるのは、たしかなことでしょう。Wittgenstein が批判しているのは、このたしかなことを何かそれ以上たしかにするような手続きが存在すると、Moore が勘ちがいしていることです。

《ムーアの誤りは、ひとはそれを知りえないという主張に、「私はそれを知っている」という言明で対抗したところにある。》(9:131)

《私はこう言いたい。ムーアは、彼が知っていると主張する事も、実は知らぬものである。ただそれはムーアにとって、私にとってと同様、ゆるがぬ真理なのである。》(9:45)

いかなる懐疑も、このような真理をひとつのこらぶ抹消し去ることはできません。というのは、懐疑という制度もしくは言語ゲームは、それと裏腹に、確実な根拠をうみだすほかないからです。

《 一定の根拠があるからこそひとは疑うのである。問題は、その疑いがどのようにして言語ゲームに導入されるのかと云うことだ。》(9:114)

《 ……言語ゲームが成立するにはしかじかのことが絶対に疑いを受けないなければならないと、個々の場合について言うことはできないようである。けれども、原則として何らかの経験命題が疑いを受けないなければならない、とは言えるであろう。》(9:130)

《 私が示さねばならないのは、疑いはたとえ可能であるにしても、不必要であるということだ。言語ゲームの可能性は、疑いうるものすべてが疑われることを前提してはいない。》(9:97)

《 私が本当に言いたいののは、言語ゲームというものは、ひとが何かを信頼する場合にのみ可能であるということだ。(私は、「何かを信頼することができる」とは言わなかった。)》(9:127)

《 知識の究極の根拠は承認にある。》(9:94)

このように Wittgenstein は、懐疑に対して何ものをも対置せず、ただそれが一般的な承認という態度に包摂されてあるしかないものであることを、示すので

《 私の世界像は、私がその正しさを納得したから私のものになったわけではない。私が現にその正しさを確信しているという理由で、それが私の世界像であるわけでもない。これは伝統として受けついで育ちであり、私が真と偽を区別するのもこれに拠ってのことなのだ。》(9:31)

\* 41

哲学的懐疑が主題としたような、思考と現実との調和(非調和)という問題は、言語と世界との調和(非調和)へとおまかえられました。しかしこの調和は、言語と世界との外側に向らかの仕方であらかじめ保証されている、とは決して Wittgenstein は考えません。むしろそれは、保証される必要のないことで

す。言語(ゲーム)とは、言語と世界とを調和したものとしてつくりなそうとする、われわれの営みなのです。従って、それが調和する理由は、(ことばではどのようにしても)問はず答へないものでしょう。

《 ……言語が生活と噛みあっているような仕方で人々が行動するのはどうしてなのか、私は知っていない。

意味は本当にただ語の使用ということにだけあるのか。意味とは、この使用が生活と噛みあう、その仕方ののではないか。》(3:79)

《 ……思考と現実の調和は言語の文法の内に見出される。》(9:196)

言語ゲームという社会的事実、思考と現実との両方をくくり出す装置なので

こうして、哲学者としての Wittgenstein が言語ゲーム論によって哲学にひとつの終止符をとうとうと企図していることが、よくわかると思います。

\* 42

ここで、小括を試みましょう。この小括は、哲学者である Wittgenstein とわれわれ(社会研究者)との距離をはかるうとするものです。

われわれ社会学は、彼(哲学)の営み(言語ゲーム)から、向をくみとるべきなのでしょう。哲学は思考(のシステム)、社会学は行為(のシステム)を解明すると言えましょう。ここにおそらくすべての差異がかけられており、ここ以外にわれわれをへだてるものはありません。

ところが、Wittgenstein によれば、思考と言語とは一体をなす(相即する)ものである。それに対して、われわれは、行為と言語とが相即しあうものであることを、仮説的に主張して行きます(〈言語〉派社会学)。このように差をならば、このふたつのアポローキは、言語を中間項として、

思考 ⇄ 言語 ⇄ 行為 (42-1)

のようなひとつながりの連鎖をつくらせて結びあうこともできるはず。われわれの日常のなかで、この三項は離れしあっているのです。(この輪転が、広義の〈言語〉にあたります。) Wittgenstein は、これを、「言語ゲーム」として描述いたしました。

(42-1) に示される連関のなりたちは、当初は、それがその外なる実在せ果とある関連を保ってあることをその根拠にしているように、見えていました。しかし、言語ゲーム論の思索が明らかにしたことは、この連関のなりたちが決してその外にある世界などに依存しないこと、人間の独自の現実を形づくる独自の秩序であるということでした。この自律的な秩序を記述の対象として拵とするとするのが、社会理論なのだと言えましょう。(すくなくとも<言語>派社会学は、この自律的な秩序の準位に、社会と呼びに値する事象をみとめるように主張しています。) このように、Wittgenstein の言語ゲームの主張は、<言語>派社会学ないし社会の記号学的諸考察の試みと連関することによって、互いに他を豊かにし、基礎を固めあうはずだ——すくなくとも一見したところは、そのように思われたとしても不思議はありません。

しかしここに、Wittgenstein の大きな罣が仕掛けられていることに、われわれはよくよく注意しないわけにはいきません。その罣は、言語ゲームの駕モチ構造とでも言うべきものです。(言語ゲーム論は、どのように明快な議論にもバタバタとまとわりついてきて、結局その論旨を台なしにしてしまう、という返るべき作用をもっている。) 彼がわれわれをどのように罣にかけるのか、見てみましょう。

\* \*

端的に言って、言語ゲームには<外>がありません。

言語ゲームには、いくつかの種類があります。それらは互いに、家族的類似によって結ばれ、境界のあいまいな一列をかたちづけています。その全体を考へることには、いみがありません。(Wittgenstein が真合論に批判的だったことを、思い出してください。) 言語ゲーム(の全体)に言及できる言語というものは、ありません。言語ゲームなるものに言及したり、言語ゲームへの言及可能性を考へたりするということも、また改めて言語ゲームにかきこられます。言語ゲームを否定しようとするどのような試みも、それ自身新しい言語ゲームであり、言語ゲーム論によってすでに予定されていたことです。それゆえかえって、言語ゲーム論の妥当性を裏書きする結果となります。

言語ゲームは、対象的な意識化を可能としない、思考の自体的な規則を含む

ので、言語ゲーム一般に対象的に言及できる言語は、実在できないのです。それゆえ Wittgenstein は、言語ゲームに関する理論というものの成立をみとめません。彼がその著述のどこにおいても、いっかなわれわれが期待するような言語ゲームに関するまとまった記述を残していないというのも、実はそのせいです。

言語ゲームは外をもたず、対象的・方法的な意識がその外に立つという余地を一切みとめません。そのいみでこれは、巨大な内閉化の運動であるということもできましょう。——これは、重大なことです。(すくなくとも、これまで) 科学はすべて、主/客の分化にもとづく対象意識として、自らをときまわしてきました。社会理論をくみだてようとするわれわれの試みにしても、ひとまずはそのような科学の列にたつらなるうとするものです。そしてわれわれはこれまで、言語ゲーム論こそ、社会をそれとしてあらしめる独自の秩序をほりあてるものであることを、確証してきました。しかもそれは、<言語>派的な着眼と軌を一にするものなのです(→(42-1))。ところがどっこい、この言語ゲームの存在を理論的に解明しようとするとき、Wittgenstein が行手に立ちふさがって言います、"君のしようとしていることはいみが無い、言語ゲームをつかまえずそれについて語るうとしても、無駄なのだ。" ということば、どういふことでしょうか。一見親和的にみえた言語ゲーム論と(<言語>派)社会理論の関係は、その実、真向から対立しあうものであって、互いに他を否定することなしには自分を主張できない仇敵同士なのではないでしょうか？

この背反——社会理論にとってみれば、言語ゲーム論の罣——は、わたしを最大級の困惑におとしおくれます。<言語>派社会学というひとつの立場を構想するわたしは、もちろん、社会的現実を解明する社会理論を築きたいのです。それには、上述の背反を、どのようにかして、調停するなり克服するなりしなければなりません。あるいはすくなくとも、言語ゲーム論の罣にどうにかして対抗し、そこを突破しなければなりません。これは、なまなかの作業では片付かないだろうと見込まれます。

「言語ゲーム論考」のここまでの論述は、一滴も自分の血を流さずに済ませても、Wittgenstein の背中を踏みつけてはたかどることができました。しかし、ここから先の論述は、自分の所在をはっきりとさせ、言語ゲーム論の罣と対峙

するようにしてしか、可能とはなりません。それは、きちんと歩をすすめてゆ  
くなら、それこそ血みどろの地獄めぐりとなるはずで。そこでこれを、ここ  
まで書きすすめてきた部分とは区別して、「言語ゲーム論考」のB稿としまし  
よう。

ここから章を改めて、B稿が以下つづくのですが、独立させて別稿とすること  
にしました。ひとつには、ここまでの部分がすでに分段的に長くなりすぎている  
ということがあります。また、言語ゲーム論に対しては、批判的にやや別な議論  
を準備して、盛りこみたいということもあります。B稿の論旨に関しては、大ま  
かな目算をつけてはありますが、詰めておりませんし、論旨の組み立てもさしか  
わるかもわかりませんから、ここで予備することはよしておきます。B稿最終の  
断頭についても、未定ということにしておきましょう。(以上、本文145枚)

## B

(別稿)

## [文献]

- Foucault, Michel 1972 Histoire de la folie a l'age classique, Gallimard, =1975 田村俊訳, 『狂気の歴史——古典主義時代における』, 新潮社.
- 橋爪大三郎 1978 「"記号空間論"の基本視座」, 『ソシオロギクス』2:1-10.
- Husserl, Edmund 1936 "Die Frage nach dem Ursprung der Geometrie", Revue international de philosophie 1-2:203-225. =1954 Husserliana VI:365-335. =1976 田島節夫他訳, 『幾何学の起源』, 青土社.
- Malcolm, Norman 1958 Ludwig Wittgenstein: A Memoir, Oxford Univ. Press. =1970 藤本隆志訳, 『回廊のワイトゲンシュタイン』, 法政大学出版局.
- Janik, Allan & Toulmin, Stephen 1973 Wittgenstein's Vienna, Simon & Schuster. =1978 藤村龍雄訳, 『ワイトゲンシュタインのウィーン』, TBSブリタニカ.
- Russell, Bertrand 1919 Introduction to Mathematical Philosophy, ? , =1954 平野習治訳, 『教理哲学序説』, 岩波文庫.
- Wittgenstein, Ludwig  
=1975-1978 山本信・大森荘蔵(eds.) 『ワイトゲンシュタイン全集』(全10巻), 大修館.
- 1:1-120. Tractatus Logico-Philosophicus(1922), 奥雅博訳, 『論理哲学論考』.
- 1:121-358. Notebooks 1914-1916, 奥雅博訳, 『草稿 一九一四—一九一六』.
- 1:359-370. "Some Remarks on Logical Form"(1929), 奥雅博訳, 『論理形式について』.

- 2:1-451. Philosophische Bemerkungen(1929-1930), 奥雅  
博訳, 『哲学的考察』。
- 3:1-345. Philosophische Grammatik, Teil I(1932-1933), 山  
本信訳, 『哲学的文法——1』。
- 4:1-366. Philosophische Grammatik, Teil II(1932-1933),  
坂井秀寿訳, 『哲学的文法——2』。
- 5:1-378. Ludwig Wittgenstein und der Wiener Kreis(1929  
-1932), 黒崎宏訳, 『ウィットゲンシュタインとウィーン学派』。
- 5:379-394. "A Lecture on Ethics"(?1929-1930), 杖下隆英  
訳, 『倫理学講義』。
- 6:19-130. Blue Book(1933-1934), 大森荘蔵訳, 『青色本』。
- 6:131-293. Brown Book(1934-1935), 大森荘蔵訳, 『茶色本』。
- 6:299-390. " "Private Experience" and "Sense Data" "(19-  
35-1936), 大森荘蔵訳, 『「個人的経験」および「感覚身  
件」について』。
- 6:391-424. "Bemerkungen Über Frazers The Golden Bough"  
(?1938- ), 杖下隆英訳, 『フレイザー『金枝篇』について』。
- 6:425-428. "A Letter to the Editor"(1933), 杖下隆英訳, 『  
『マインド』の編集者への書簡』。
- 7:1-400. Bemerkungen Über die Grundlagen der Mathematik  
(1937-1944), 中村秀吉・藤田晋吾訳, 『数学の基礎』。
- 8:1-479. Philosophische Untersuchungen(1936- ), 藤本隆志  
訳, 『哲学探究』。
- 9:1-170. Über Gewissheit(1949- ), 黒田直訳, 『確実性の問題』。
- 9:171-394. Zettel(1929-1948), 菅豊彦訳, 『断片』。

- 10:123-260. Lectures and Conversations on Aesthetics, Psy-  
chology and Religious Belief(1938-1946),  
藤本隆志訳, 『美学、心理学および宗教的信念につい  
ての講義と会話』。
- 10:1-122. Wittgenstein's Lectures in 1930-33, 藤本隆志訳, 『ウ  
ィットゲンシュタインの講義—一九三〇—一九三三年』。

CN 101 HASHIZUME, Daisaburo  
¥ 155-

1980-4-29

集 (Wörterbuch für Volks und Bürger-schulen) を出版。  
 四月 小学校教師を退職。月末シュリックがオッテルタルへ来訪したが既に転居後であった。  
 春-夏 ウィーン郊外のヒュッテルドルフの修道院で園丁の助手を勤める。  
 秋 一番下の姉マルガリート(ストンポロ夫人)のために、ウィーンのクントマン通りに邸宅を建築(当初はエンゲルマンと協働、完成に二年を要した)。また、友人の彫刻家ドロビルのスタジオで彫刻にこしむ。  
 一九二七年 三八才  
 二月下旬 シュリックとストンポロ邸で初めて会う。(以後シュリックの友人達、ヴァイスマン、カルナツフ、フアイグル等とも会うようになる。)  
 一九二八年 三九才  
 三月 数学者ブラウアーの講演を聴く。これで再度哲学に専心する気になる。  
 一九二九年 四〇才  
 一月末 ケンブリッジに赴く。研究生として登録。  
 六月 『論考』により学位授与。なお口述試験は六月六日に行われ、ラッセルとムーアが試験官であった。  
 六月 トリニティ・カレッジより研究費支給が決定される。  
 七月 ノッテンガムで行われたマインド協会とアリストテレス協会の合同学会で発表。原稿は『論理形式について』(Some Remarks on Logical Form)と題し、『プリムトランス協会年報』(Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volume, IX, 162-71)に収録。しかし新

日は全く別の内容の発表を行う。  
 九月以降翌年にかけてのある時 「異教徒たち」という名で知られる会合で倫理学に関する講演。六五年に公刊。  
 休暇中はウィーンに戻るが、この年よりシュリック、ヴァイスマンとだけ会う。(この年二月から三年七月にかけての会談内容の、ヴァイスマンによる速記録が『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』として後に公刊。)  
 一九三〇年 四一才  
 一月 トリニティ・カレッジのフェローとなる。講義をはじめめる。(この時期の講義内容はムーアの『ウィトゲンシュタインの講義一九三〇-三三』で知りうる。)  
 一月 最良の討論相手のラムゼイ天坊。  
 一月 一九二九年一月からこの年の五月にかけての草稿をもとに、夏休みに準備した著書『哲学的考察』の序文を書く。未完成の部分もあり、改訂を企てるが、他の著作の計画が生じ(三二年七月)中止。原稿はムーアに託される。  
 一九三二年 四二才  
 七月 『哲学的文法』と題する著作の計画を抱く。  
 七月後半-八月初め フレイザーの『金枝篇』についてメモを書く。  
 一九三三年 四三才  
 三〇年七月よりこの七月にかけて書いたメモを中心に、年の終りから三四年のはじめにかけて『哲学的文法』の原稿を準備。  
 一九三三年 四四才  
 『論考』の第三版発行。部分的にはあるが、かつてのラムゼイとの検討が、オグデンの改訂に生かされている。  
 七月 マインド誌編集者への手紙(Letter

to the Editor, Mind 42, 415-6)で『論理形式について』を「不出来」と評する。夏休みイタリーに赴き、シュリックと共に過ごす。  
 秋から翌年にかけての講義の原稿が後に回覧され、『青本』と通称される。  
 一九三四年 四五才  
 秋から翌年にかけての講義の原稿が後に回覧され、『褐本』と通称される。  
 一九三五年 四六才  
 一旦、フェローの在職期限が切れる。友人を伴い訪ソ。  
 フェローの職は一年延長となる。  
 この時期の講義の内容は、数学の基礎に関するものを除き、『私的経験』と『感覚所与』について(六八年公刊)で推測できる。  
 一九三六年 四七才  
 冬学期終了後、ノルウェーに赴く。  
 八月 従来試みていた『褐本』の改良によるドイツ語の著作の計画を放棄。『哲学探究』の準備にかかる。  
 この年 シュリック死。  
 一九三七年 四八才  
 ノルウェーを去り、ケンブリッジに戻る。  
 一九三八年 四九才  
 独逸合併、イギリスに帰化。  
 一九三九年 五〇才  
 ムーアの後任としてケンブリッジ大学教授となる。  
 この時期の講義内容は、数学の哲学的基礎、意味、信念の問題について。  
 一九四二年 五三才  
 (あるいは前年から)戦時協力として、ロンドンのガイズ病院で作業員を勤める。  
 一九四三年 五四才  
 ニューカースルのヴィクトリア病院の臨床

医学研究所に勤務。  
 一九四四年 五五才  
 秋にはケンブリッジに戻っている。  
 一九四五年 五六才  
 『哲学探究』の原稿はほぼ完成(後の同書第一節)一月付の序文。  
 一九四六年 五七才  
 この年の初め、講義再開。内容は心理学の哲学が中心。  
 一九四七年 五八才  
 夏休み前の学期 最終学期となる。  
 秋学期 休暇をとりオーストリアへ旅行。次いでアイルランドへ行き、ウイタローの片田舎に住む。  
 十一月三日 教授退任。  
 この年から四九年の原稿が『哲学探究』第一部となる。  
 一九四八年 五九才  
 春 アイルランドのロスロに移る。  
 初秋 ウィーンへ旅行。  
 一〇月 帰途ケンブリッジに二週間滞在。その後、ダブリンのロシズ・ホテルに滞在。著述に励む。  
 一九四九年 六〇才  
 一月 発病、腸疾患。  
 四月 ウィーンへ行き、ガンの長姉を見舞う。又、ダブリンへ戻る。  
 七月 マーコムを招待して訪米。マーコムや彼のコーネル大学での同僚達と討論。  
 一〇月 イギリスへ戻る。  
 晩秋 ガンであることが判明。  
 十一月 ウィーンへ行く。  
 なお、訪米中マーコムに刺殺され、ムーアの二論文『外界の証明』『常識の基礎』についてメモを書き残している。(死の二日前まで書き続けられたメモが、後に『確同性

の問題』と題して公刊された。)  
 一九五〇年 六一才  
 三月末まで ウィーン滞在。  
 四月 イギリスに戻り、オックスフォードでアンソム名に寄寓(翌年二月まで)。秋、ノルウェーに友人と行き、五週間ほど過ごす。  
 一九五一年 六二才  
 二月 ケンブリッジに移り、スヴァン医師宅に寄寓。  
 四月二七日 夜、発作がおこる。  
 四月二十九日 死去。  
 一九五三年 『哲学探究』(Philosophische Untersuchungen) ノラックウェル社より出版。  
 一九五四年 『Wittgenstein's Lectures in 1930-33』(Mind 63-4)に掲載。  
 一九五六年 『数学の基礎』(Remarks on the Foundations of Mathematics) ノラックウェル社より出版。(三二-四四年の原稿の編集)  
 一九五八年 『青本』(The Blue and Brown Books) ノラックウェル社より出版。  
 一九六一年 『ピアースとモックキス新訳の『論考』』がタガン・ホール社より出版。  
 『草稿一九一四-一六』(Notebooks 1914-1916) ノラックウェル社より公刊。(三二年九月、一四年四月の前述のノートを含む。)  
 一九六四年 『哲学的考察』(Philosophische Bemerkungen) ノラックウェル社より公刊。  
 一九六五年 『倫理学講話』(A Lecture on Ethics)

Philosophical Review, 74, 3-12. に掲載。(一九九〇年の講演原稿)  
 一九六六年 『美と心理学及び宗教的信念について』(Lectures and Conversations on Aesthetics, Psychology, and Religious Belief) ノラックウェル社より公刊。(三八年夏、及び同時期の講義、四二-四四年の間になされた談話、の出席者のノートからの編集。)  
 一九六七年 『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』(Wittgenstein und der Wiener Kreis) ノラックウェル社より公刊。  
 『断片』(Zettel) ノラックウェル社より公刊。(一九九〇年より四八年八月迄、ほとんど大部分は四五年以降の『原稿の編集』) 『金持篇』(Goldschmied) (Bemerkungen über Frazers The Golden Bough) Synthese, 17, 233-53. に掲載。(三二年夏(ノート)の編集。)  
 一九六八年 『私的経験』と『感覚所与』について』(Notes for Lectures on "Private Experience" and "Sense Data") Philosophical Review, 77, 271-350. に掲載。(三四年後半又は三五年はじまり) 三六年三月迄のノートの編集。)  
 一九六九年 『哲学的文法』(Philosophische Grammatik) ノラックウェル社より公刊。  
 『確同性の問題』(On Certainty) ノラックウェル社より公刊。  
 一九七一年 『論考草案』(Prototraktat) ケガン・ホール社より公刊。(五二年にストンポロ夫人宅で発見されたノート三冊分の手稿。)

# ワイトゲンシュタイン年譜

奥 雅博 編

一八八九年  
四月二六日 ルートヴィヒ・ヨーゼフ・ヨハン・ワイトゲンシュタイン Ludwig Josef Johann Wittgenstein ウィーンにて出生。  
九人兄弟の末子で五人の兄、三人の姉がいた。父方の家系は祖父の代に新教に改宗したユダヤ人であり、祖父の代にライプツヒクからオーストリアに移住してきた。母方も半ばユダヤ系であるが、旧教信者である。ルートヴィヒは旧教の洗礼をうける。  
父カール(一八四七生)はオーストリアの鉄鋼業界の指導者であり、又長年新聞に経済評論を寄稿していた。一家のサロンは芸術的な雰囲気満ち、ブラームスは親しい友人である。しかし父親はギムナジウムの古典教育になじまず、少年の時アメリカ各地を独力で遍歴した経験を持つためか、子供には家庭教師をつけ、実践的な教育を施した。この方針は失敗し、年上の三人の息子は自殺。四男のパウルは著名なピアノストとなる。

一九〇三年 一四才  
家庭教師の手を離れ、リンツの実科学校  
一九〇六年 一七才  
(古典教育中心ではない高等学校)に入學。  
実科学校卒業。  
ベルリン・シャルロテンブルクの工科大  
学入學。  
一九〇八年 一九才  
春までベルリン滞在、その後渡英。  
夏 英国ダービシャーの高空観測所で風の  
実験を行う。  
秋 マンチェスター大学工学部に研究生として  
登録、航空工学を研究。(一年まで在  
籍)  
一九一一年 二二才  
学問的関心はこの間、ミンジンの研究、プロ  
ロペラのデザイン、数学、そして数学基礎  
論と移っていく。  
フレীগをイェナに訪れ、ラッセルの許で  
学ぶよう勧告される  
秋 ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ  
に学生として登録。  
一九一三年 二四才  
夏休み前まで ケンブリッジに学部学生、次  
いで大学院学生として在籍。この間、ラッ

セル、ムーアの講義に出たほか、ラッセル  
と論理学の共同研究を行う。また音楽のリ  
ズムに関する心理学実験を行う。  
九月 友人ビンセントと共にノルウェー訪  
問。  
九月 『論理に関するノート』(Notes on  
Logic)を書き、ラッセルに贈る。  
一〇月 一旦イギリスに戻り、再びノルウェ  
ーに渡り、シヨルデンという寒村に住む。  
この年 父親ガンで死亡。  
一九一四年 二五才  
春 第一次世界大戦勃発。  
四月 ムーアがノルウェー訪問の折、ノート  
を口述する (Notes dictated to G. E.  
Moore in Norway)。  
七月二六日 女雑誌「ブレンナー」の編集者  
フィッセルにウィーンではじめて会う。ほ  
どなく建築家ロイスとも知り合いになる。  
父親の遺産をフィッセルを通じて文学振興  
のための匿名奨励金とする。(リルケ、ト  
ラークル等が意思にあずかる)  
八月七日 オーストリア・ハンガリー軍の要  
塞砲兵連隊に志願兵として入隊。  
八月一九日 ガリシア(南部ポーランド)戦  
線に出陣、その後ヴァイクセル河上の艦船  
で下級の職務。  
二月 クラカウの砲工廠に転属、技術者と  
しての能力が認められる。  
七月末頃以降 レンベルク地方ゾカルで砲工  
列車に勤務。  
一九一六年 二七才  
三月二二日 前戦に転出。ガリシアのザノク  
にて一時的に送られる。  
一九一五年 二六才  
一〇月 前年秋から進められていたケガン・ポ  
ール社からの『論考』出版のための英訳原  
稿を、オグデンから受取る。  
四月 英訳その他の検討を終え、原稿をオグ  
デンに返送。  
夏 校正副を検討。(八月四日返送)  
八月下旬 インスブルックでラッセルと会  
う。  
九月 低オーストリア地方ノインキルヘン近  
郊のハスバッハの中学校教員となるが、程  
なくシュネーベルクのもとブーフベルク  
の小学校教員となる(二四年の夏まで)。  
秋 ケガン・ポール社より『論考』が独英対  
照版で、五月付のラッセルの序文を付し  
て、『論考』の影響が出はじめる。  
一九一三年 三四才  
九月 ラムゼイがケンブリッジからブーフベ  
ルクに来訪、『論考』について討論。  
一九一四年 三五才  
三月一〇月 ラムゼイ、ウィーンに滞在、  
幾度かブーフベルクへ来訪。  
秋 キルヒベルク・アム・ヴェクセル近郊の  
オッテルタールの小学校に移る(二六年四  
月まで勤務)。  
一九一五年 三六才  
前年末か一月 ウィーン大学教授シュリッ  
クから手紙を受取る。  
夏 ケインズの勧めで訪英、主にケンブリッ  
ジとマンチェスターに滞在。  
一九一六年 三七才  
ウィーンのホルダー・ビーレル・テンブス  
キー社より小学生のためのドイツ語の語彙

基地の榴弾砲連隊に配属。榴弾砲兵とな  
る。  
七月一日 照準手(もしくは装てん手)とな  
る。  
七月四日以降の戦闘で勲章をうける。  
八月一日 伍長に昇進。  
その後 モラヴィアのオルミニッツの砲兵士  
官学校へ送られる。オルミニッツで建築家  
ミンゲルマンと知り会う。  
一二月一日 見習士官に昇進。  
なお四月一五日から翌年一月一〇日までのノ  
ート残存。  
一九一七年 二八才  
一月 再び連隊に戻る。ルーマニア地方の東  
部戦線に従軍。(七月の大戦闘を別とすれ  
ば、ほとんど陣地戦である)。  
休暇の折、オルミニッツを訪れる。  
一九一八年 二九才  
二月一日 尉官に昇進。  
三月 イタリヤ戦線に転属。山砲連隊に配属  
となる。  
七月半ば 最後となった戦闘があり、勲章を  
うける。  
その後 休暇。休暇中に『論理哲学論考』を  
仕上げる。(序文は八月にウィーンで書か  
れる)。  
夏 ウィーンのヤホダ・ジーゲル社に『論  
考』の出版を依頼。  
一〇月 ヤホダ、出版を断る。  
一〇月 オーストリア・ハンガリー軍降服。  
一月三日 捕虜となる。以降主としてイタ  
リアのモンテカンノ近郊の収容所に収容さ  
れる。  
一九一九年 三〇才  
二月九日 ラッセル宛にはじめて手紙を出し  
連絡がとれる。

六月 ケンブリッジ時代の友人で経済学者の  
ケインズの手を介して、ラッセルに『論  
考』の原稿を送る。(また、後にフレীগ  
にも送る)。  
八月後半 復員。  
九月 ウィーンの師範学校に入學。  
秋 『論考』の公刊をブラウミューラー社、フ  
レーグ、フィッセルに依頼するが、いずれ  
も実現せず。  
一月中旬 オランダへ友人スヨグレンと共に  
赴き、ハーグでラッセルと会う。ラッセ  
ルは『論考』の紹介解説の序文を書く労を  
とることを約束。この後でフレীগを訪  
問する計画はスヨグレンの発病で中止。  
一九二〇年 三二才  
ラッセルの序文を付して『論考』をレク  
ム社から出版することを計画。  
四月上旬迄にラッセルの序文を受取る。序文  
に不満を表明、序文なしでの出版を希望。  
五月 レクム社での計画実らず。  
七月八日 師範学校修了。  
夏休み ウィーンのノイブルク修道院で園  
の助手を勤める。  
九月 低オーストリア地方キルヒベルク・ア  
ム・ヴェクセル近郊のトラッテンバッハで  
小学校の教員となる(二二年夏まで勤務)。  
一九二二年 三三才  
一月二四日 ケンブリッジ大学出版会の理事  
会、『論考』出版の企画を却下。  
二月 オストワルドが『論考』の公刊を承  
諾。  
夏休み スヨグレンと共にノルウェーのシ  
ルデンに行く。  
秋 オストワルド、編集の『自然哲学年報』  
(Annalen der Naturphilosophie) 第一四  
巻三四分冊でラッセルの序文の独訳を

付して、『論理哲学論考』(Logisch-philoso  
phische Abhandlung) 掲載され。  
一九二三年 三三才  
三月 前年秋から進められていたケガン・ポ  
ール社からの『論考』出版のための英訳原  
稿を、オグデンから受取る。  
四月 英訳その他の検討を終え、原稿をオグ  
デンに返送。  
夏 校正副を検討。(八月四日返送)  
八月下旬 インスブルックでラッセルと会  
う。  
九月 低オーストリア地方ノインキルヘン近  
郊のハスバッハの中学校教員となるが、程  
なくシュネーベルクのもとブーフベルク  
の小学校教員となる(二四年の夏まで)。  
秋 ケガン・ポール社より『論考』が独英対  
照版で、五月付のラッセルの序文を付し  
て、『論考』の影響が出はじめる。  
一九一三年 三四才  
九月 ラムゼイがケンブリッジからブーフベ  
ルクに来訪、『論考』について討論。  
一九一四年 三五才  
三月一〇月 ラムゼイ、ウィーンに滞在、  
幾度かブーフベルクへ来訪。  
秋 キルヒベルク・アム・ヴェクセル近郊の  
オッテルタールの小学校に移る(二六年四  
月まで勤務)。  
一九一五年 三六才  
前年末か一月 ウィーン大学教授シュリッ  
クから手紙を受取る。  
夏 ケインズの勧めで訪英、主にケンブリッ  
ジとマンチェスターに滞在。  
一九一六年 三七才  
ウィーンのホルダー・ビーレル・テンブス  
キー社より小学生のためのドイツ語の語彙